

明日に生きる

—作文コンクール入選作品集—

第33号



令和4年度



東京都産業教育振興会

表紙デザイン

「貢献」「まちづくり」「労働」「創造」のそれぞれの喜びが、“まち”中に広がってほしいと思い、この絵を描きました。忘れがちだったり、当たり前だと思ってしまったりしますが、この絵に描かれたような方々が支えてくれているおかげで、私たちが生きる“まち”が、より良くなっています。感謝の気持ちを忘れず、私たちも“まち”をさらに良くできたらいいなと思いました。

東京都立晴海総合高等学校
1年 兜 心 響

明日に生きる

第三十三号

— 作文コンクール入選作品集 —

明日に生きる ―作文コンクール入選作品集― 第三十三号 目次

講 評

ページ

作文選考を通じて

中学校の部

選考委員長（町田市立真光寺中学校長）

矢島 加都美

1

作文選考を通じて

高等学校・専修学校等の部

選考委員長（東京都立晴海総合高等学校長）

仁井田 孝春

2

中学校の部

ページ

最優秀賞

仕事にかける思い

墨田区立両国中学校

一年 塚本 笑里

3

優秀賞

謙虚な姿勢

中央区立銀座中学校

三年 渡辺 妃那

4

優秀賞

海外派遣事業に参加して

墨田区立両国中学校

二年 宮崎 夏美

6

優秀賞

失敗から学んだ「ものづくり」の喜び

町田市立真光寺中学校

三年 春山 魁志

8

佳作

夢と父の存在

中央区立銀座中学校

三年 植松 心音

9

佳作

サッカーと夢と仕事

中央区立銀座中学校

三年 齋藤 優輝

10

佳作

未来のための一挙両得

中央区立晴海中学校

三年 秩父 こなつ

12

佳作

技術を学んで

中央区立佃中学校

三年 西脇 琉風

13

佳作

みんなの笑顔

中央区立佃中学校

三年 平澤 美宝

14

佳作

新たな学び

新宿区立西早稲田中学校

三年 篠原 暖

16

佳作

プログラミングとその学習の重要性

新宿区立西早稲田中学校

三年 内藤 義人

17

佳作

憧れた未来

新宿区立新宿西戸山中学校

三年 笹又 美椿

18

佳作

未来へ一歩

墨田区立両国中学校

二年 庭山 絢

20

佳作

ものづくりのやりがい

墨田区立両国中学校

二年 花井 優太

22

佳作

つくることから生まれる喜び

大田区立大森第六中学校

二年 宇都野 璃子

23

高等学校の部

佳作	夢と思い出をくれた職場体験	杉並区立高南中学校	二年	小島夏音	24
佳作	ボランティアから学んだ「仕事」というもの	北区立稲付中学校	三年	三澤双葉	26
佳作	プログラミング学習から得たもの	荒川区立尾久八幡中学校	三年	山下千加良	27
佳作	憧れが放つ輝き	調布市立第八中学校	三年	野口蓮香	29
佳作	将来の夢	愛国中学校	三年	野口桜	31
最優秀賞	技術を持った養豚家を目指して	東京都立瑞穂農芸高等学校	三年	松井幸生	33
優秀賞	真の持続型農業	東京都立園芸高等学校	二年	小林陽菜	34
優秀賞	伊豆大島の香り	東京都立大島高等学校	三年	雨宮雛恵美	36
佳作	植物に触れて感じたこと	東京都立園芸高等学校	二年	葛西花	37
佳作	大気汚染対策「マイ植樹帯制度」	東京都立園芸高等学校	二年	田島美優	39
佳作	郷土料理を守り続けるために	東京都立農芸高等学校	二年	川口紘花	40
佳作	これからの農業	東京都立農芸高等学校	二年	玉置藍	42
佳作	私の進路、将来の夢	東京都立農産高等学校	三年	磯山あづ美	44
佳作	園芸を通してもっと住みやすい社会に	東京都立農産高等学校	一年	菊池愛利	45
佳作	着たい服が着られるように	東京都立農業高等学校	二年	杉崎結愛	47
佳作	つくることの喜び・ものづくりの喜び	東京都立瑞穂農芸高等学校	三年	鈴木小夏	48
佳作	食の未来を支える	東京都立瑞穂農芸高等学校	三年	村田彩羽	50
佳作	働くことの喜び	東京都立葛西工業高等学校	二年	水貝颯	52
佳作	夢を見つけることが出来た	東京都立葛飾商業高等学校	三年	竹下由姫奈	53

佳作	私が実習で学んだこと	愛国高等学校	三年	石丸莉菜	55
佳作	私の夢	愛国高等学校	三年	中村柚香	56
佳作	看護師を目指して	愛国高等学校	二年	酒井彩名	58
佳作	高校生活半分を経て見据える未来	岩倉高等学校	二年	桜庭翼	60
佳作	冒険の始まり	京華商業高等学校	二年	浅古采碧	61
佳作	私が描く将来への道	国際共立学園高等専修学校	一年	川井月那	62
専修学校の部					ページ

最優秀賞	父の背中が教えてくれた「働く意味」	青山製図専門学校	一年	後藤祐杏	65
優秀賞	専門学校での学び	青山製図専門学校	一年	齋藤優介	66
イラストの部					ページ

最優秀賞	東京都立晴海総合高等学校	一年	兜心響	68
優秀賞	東京都立晴海総合高等学校	一年	山田奈々実	68
優秀賞	東京都立府中西高等学校	一年	永良紫織	68

表彰式の様子	令和4年度作文コンクール応募校等一覧（応募者数・入選者数）	69
応募校数・応募者数・入選者数の推移		70
作文のテーマ別応募者数一覧		71
令和4年度作文コンクール募集要項		72
令和4年度作文選考委員名簿		73
あとがき		75
		76

作文選考を通じて

中学校の部 選考委員長

町田市立真光寺中学校長

矢 島 加都美



今年度は、二十四校百三十編の応募がありました。ただ、一つの学校から事務局に応募できる応募数は決まっているため、作文の応募数はもっと多かったと考えられます。

まず。選考委員会では、一次審査、そして二次審査を経て二十編を選入として、最優秀賞一編、優秀賞三編を選考いたしました。どの作文もすばらしく、入選作品を絞ることも、さらに最優秀賞、優秀賞を決定することも大変苦労しました。今回、最優秀賞を受賞した塚本笑里さんの「仕事にかける思い」は、外出自粛だからこそ思い出に残ることをしようと、区のジュニアレポーターに応募。取材を通して、「仕事を誇りに思い、熱意や愛をもって仕事がしたい」と力強い気持ちが伝わってきました。

優秀賞の渡辺妃那さんの「謙虚な姿勢」は、板前のお父さんの仕事に対する姿勢から「父に、謙虚になったな」と言われるように仕事に取り組む決意が書かれていました。

宮崎夏美さんの「海外派遣事業に参加して」は、海外派遣生として準備をしてきたが、感染拡大のためにオーストラリアへの派遣は中止に。気持ちを切り替えて、国内留学（TIG）を有意義な体験になるように工夫した。今はこのような状況の中、区の教育委員会の方、先生方のおかげで貴重な体験ができたことに感謝し、将来は外国と墨田区の架け橋になると強い気持ちで結んでいます。

春山魁志さんの「失敗から学んだ『ものづくり』の喜び」は、一・二年生の技術分野の作品作りでは失敗したため、友達にほとんど手伝ってもらった作品は愛着がわかなかった。三年生になり「最後は真剣に」という気持ちで完成させた作品から「ものづくりの喜び」がわかり、これからは試行錯誤しながらものづくりを続けるとありました。

今年度の作文の内容から、依然、コロナ禍ではありますが、感染対策をしながら教育活動は少しずつ平常に近い取り組みが戻ってきています。しかし、授業では、グループでの活動や職場体験学習など制限はまだまだ解除にならない部分があります。大人は「子供たちがかわいそうだ」と悲観的な思いがありました。このような不便な中でも、生徒たちは今できる中で楽しみを見つける逞しさが伝わってきました。

最後に今回の「作文コンクール」に応募していただいた多くの生徒のみなさんありがとうございました。また、ご指導いただいた先生方、貴重な体験をさせていただいた地域、事業所の皆様、温かく見守ってくださいました保護者の皆様に感謝申し上げます。

作文選考を通じて

高等学校・専修学校等の部 選考委員長

東京都立晴海総合高等学校長

仁井田 孝 春



今年度は、高等学校の部に一二九作品、専修学校の部に十三作品の応募がありました。一次審査、二次審査を経て、高等学校の部では、最優秀賞一作品、優秀賞二作品、佳作十七作品、専修学校の部では、最優秀賞一作品、優秀賞一作品を選考致しました。

高等学校の部の最優秀賞は、東京都立瑞穂農芸高等学校三年の松井幸生さんの作品で、題名は「技術を持った養豚家を目指して」です。松井さんは、養豚場でインターンシップを体験し、想像以上に養豚業には繊細な技術が必要であり、その仕事に魅力を感じ、将来、消費者に「おいしい」と言ってもらえる豚肉を届ける養豚家を目指すことを決意したと述べています。是非、農業高校での学びを深め、夢を実現することを期待しています。

優秀賞は、東京都立園芸高等学校二年の小林陽菜さんの「真の持続型農業」、東京都立大島高等学校三年の雨宮雛恵美さんの「伊豆大島の香り」の二つの作品です。いずれも高校で

の学びと地域での体験活動や調査研究を通して、将来の自身の職業に結び付けるとともに、産業の発展に寄与したいという強い意欲を感じる作品でした。

専修学校の部の最優秀賞は、青山製図専門学校一年の後藤祐杏さんの「父の背中が教えてくれた『働く意味』」です。後藤さんは、宮城県出身。東日本大震災で被災しました。父親の経営する会社が津波により消失してしまいましたが、地元復興と社員の雇用を守るために奮闘して会社を再建する父親の姿を見て、働くことの意味を見出しました。そして、建築士になることを目指して、専修学校で学び、社会を支える人間になりたいと述べています。是非その志を実現して欲しいと願っています。

優秀賞は、青山製図専門学校一年の齋藤優介さんの「専門学校での学び」です。社会人経験のある齋藤さんは、建築の専門的な知識・技術を一層深めるために、学び直しをします。顧客とともに考え、設計関係者と協働し、利用者が快適に感じるデザインという付加価値も添えて、建築業界にインベーションを起こそうとする意気込みを感じる作品でした。

選考委員会においては、いずれの作品も応募者の皆さんが各学校において熱心に学ぶとともに、将来の生き方・在り方を考え、希望をもって社会に貢献しようとする姿が表現されており、甲乙つけがたい素晴らしい作品ばかりであるという高い評価になり、審査には長時間を要しました。

結びに、応募して頂いた皆さんの一層の活躍を期待するとともに、丁寧にご指導頂いた先生方に厚く感謝申し上げます。

中学校の部



中扉デザイン

提示された4つのテーマを元に「職業教育」「労働」「創造」を意識してデザインしました。正面に描いてある男の子は、まだ未熟な生徒で、花を咲かせていません。ですが、その先には、労働の喜び、こだわりなどを感じ、自分の花を咲かせている大人達がいます。蕾と花が繋がっているのは、生徒の間に学んだことは、将来に繋がっていくのだということを表現したかったからです。

東京都立晴海総合高等学校

1年 山 田 奈々実

中学校の部 最優秀賞

仕事にかける思い

墨田区立両国中学校 一年

塚 本 笑 里

私は夏休み、外出自粛で家にこもる日々が続いていた。だから、夏休みは思い出に残ることをしたくて、ジュニアレポーターに応募した。転校してきて墨田区を知る機会も少なかったから、ジュニアレポーターで墨田区を知って、学びたい。この思いが届いたのか、ジュニアレポーターの一人に、私は選ばれることができた。

初日、私は気を引き締めて区役所に向かった。指定の部屋に着いたが、やっぱり緊張してしまう。他の人も緊張しているのか、表情が硬い。一人、一人と人数が増えていき、全員が揃った。最初は自己紹介をした。あみだくじで決め、私から話すことになってしまった。人前で話すのが苦手な私は、焦って嚙んだり早口になってしまふことが多かったが、みんなが話していくうちに、空気が和らいでいくのを感じた。その後は簡単なゲームをして休憩を挟み、段々みんなの口数も増えてきた。

本題に入り、それぞれ調べて決めたテーマを発表し、二つのチームに分かれてテーマを絞ることになった。私達のチームは真剣に議論した結果、「すみだの産業」に、残った

時間で決めたチーム名は「チームクラフト」になった。これからチームのみんなと活動していくのが、少し不安でもあったが、同時に私は、とても楽しみだった。

ジュニアレポーター第二回。今日は初めての取材だ。残念ながら一人休んでしまったが、経験者のチームメイトと共に、取材先の会社に向かう。この会社は一九四四年創業の老舗で、看板商品の如雨露（じょうろ）は海外の園芸家にも人気がある。チームメイトはカメラ役、私はインタビュー役で取材に挑むことになった。

取材先の会社に着いた。私が思っていた工場とは違い、住宅街の中にひっそりと佇む町工場のような感じで、墨田区は町工場がとても多いことを実感した。中に入ると、三代目の社長さんが出迎えてくださり、如雨露作りに対する思いを熱く語ってくださった。

「昨日の自分より更に速く、質の良い如雨露を作りたい。」昨日の自分をライバルにして、より如雨露作りを極めたいと、向上心をもつことが大切だという。墨田区の他の企業と協力して展覧会を開いたり、日本の世界に共通する技術をもっと世界に知ってもらおうと、励む姿には感心した。空き缶如雨露作り体験では、初めてはんだ付けを体験した。まず取っ手を曲げ、次に空き缶に穴を開けて、それぞれのパーツを取り付ける。その後は研磨材で磨き、完成と、少し手間がかかる如雨露作り。少々不恰な出来にはなったものの、社長さんのサポートのおかげで、しっかり如雨露として機能している完成品になった。間近で職人の技を見ることができて、とても貴重な体験だった。

家に帰った後は、課題の原稿に取り掛かることにした。長く愛される秘訣や、職人魂についてを工夫して書きとめ、社長さんの思いをそのまま表せるように努力した。その後、メールで文章を送信し、気づけばすぐ、一週間後の次の取材先の日になっていた。

ジュニアレポーター第三回。今日は、最後の取材の日。幸い三人揃い、ようやくチームで取材できることに。カメラの撮影の仕方も練習し、準備万端。三人で取材をすることが楽しみで楽しみで、気持ちが落ち着かない。今日の取材先は前回の会社とは違い、大きな工場で製品を作っている会社だ。二つの企業の違いを是非、比べてみたい。私は前回の会社と比べて見て、取材することにした。

今回の会社は、ボディケアやスキンケア製品を製造する会社で、たくさん油を使用する製品が多い。工場に入った時、トラックに何個も積まれたタンクを見た。実際に石けんを作っているところでは、社員の人達が手を取り合い、一生懸命働いていて、さらに釜場という油を高温で溶かして、純粋な成分だけを取り除く場所では、釜が約八十度もあってとても熱いのに、嫌そうな顔一つ見せず、真剣に釜の中をかき混ぜていた。このように、社員の人達が真面目にコツコツ仕事に取り組んでいるのは、会社の方針が関係しているのだという。「物づくりは人づくり」、入社の説明の時も、あいさつ、整理整頓、話を聞く態度と、コミュニケーションに関することが二つも入っていて、人の内面を大事にしていることがわかる。今回の会社は、社員の温かい心があるからこそ、気持ちのこもった製品になるのかもしれない。

私はジュニアレポーターの活動を通して、夏休みを有意義なものに変えることができた。墨田区を学べ、取材をする時のメモや文章力が上がったのもそうだが、誰かと協力して、一面の記事を作り上げるのがとても楽しく、思い出に残ることだったから、という理由もある。そして、様々な職人さん達の仕事にかける熱い思いが、とても眩しいものだったからだ。自分をライバルに、毎日仕事に励む一つめの会社や、温かい心を持って製品を作る二つめの会社は、私の人生観を変えてくれた。私も将来、働いてお金を稼ぎ、生活していく。でもその時の仕事は、自分がその仕事を誇りに思い、熱意や愛をもってずっと働き続けられるような、そんな仕事に就きたい。

中学校の部 優秀賞

謙虚な姿勢

中央区立銀座中学校 三年

渡辺 妃那

私はまだ将来就きたい職業がない。だから、自分がどうしたいかが無い。だが、こういう風に仕事をしたいと思うことはある。

私は、一つのことを突き詰めていきたいと思う。私の父は京料理の板前をしている。小学校四年生のころから料理を仕

事にしたいと考えていたそう。私は、一つのことを突き詰めて、輝いている父を尊敬している。父の仕事に対する姿勢は私の理想だ。父は自営業なので、夜の営業がほとんどなのだが、終わった後、店に寝泊まりで仕込みをしたり、朝の買い付けに行ったりしている。徹夜で帰ってくることもしばしばある。他にも、父は、食材などもすごく大切にしている。予約が前日にキャンセルとなり、食材がダメになってしまうかもしれない時、とあるお客さんが、

「予約がキャンセルになったのなら、是非食べたいです。」

と申し出てくださり、それに涙を流しながら感謝する父を見た。こんな父は初めて見たので衝撃的だった。こんなに食材を大切にしている父に調理された食材は幸せだろうなと思った。他にも父は、

「二コースに十品出すとする。その時、一品でも美味しくないと思ったら次はない。次も来てもらうために、常に百パーセントのパフォーマンスにしなければいけない。」

という。そこまでしなくてもいいのに、と思うが、完璧を求める父のおかげでリピート率は驚くほど高い。こんな父の料理は、人の心を動かす。□コミなどで父のお店を見ると、「今まで、食べられないとよく私に皿を回していた妻が完食しました。」や「母が泣きながら喜んでくれました。」というコメントを見る。そのコメントを見るたびに、

「俺、できる子だから。」

と、冗談めかして言う。でも、自分の料理がうまくいかないことに悔しさを滲ませたり、泣いたりしている父の姿を見る。人を感動させる料理を作るのに、上を目指して謙虚に頑張

る父はカッコいい。

私はそんな父のように、仕事をするとき、謙虚さ、完璧さ、物を大事にする姿勢を大切にしていきたい。冒頭で私は、将来就きたい職業がないといったが、興味がある分野はある。将来、私は、古典に関する仕事をしたいと考えている。古典は、私が小学校二年生のころから好きだった。一つの事を突き詰めていく父に憧れる私は、古典を突き詰めていきたいと考えている。その中で、父の姿勢は理想であり、お手本だ。父は私によく、

「謙虚さが足りない」

という。そしてこの言葉を教えてくれる。

「実るほど、頭を垂れる、稲穂かな。麦のように実ってもピンとしていないで、物を知れば知るほど、相手に頭を下げられるようにならさい。」

と。父は、誰にでも、「お願いします。」や、「ありがとうございます。」と言っている。お陰で、

「渡辺さんならいいよ。」

と言ってくださる人が多い。私も将来、色々な人に助けってもらいながら生きていくと思うので、その人たちに、快く受けてもらえるように、謙虚さ、人を大事にすることを大事にしたい。

私は、謙虚さ、人、物を大事にする姿勢、完璧さを求めている。これは、仕事以外にも人として大事なことだと思う。自分がこれから先どんな職業に就いても、この姿勢を忘れずに、父に近づけるようにしたい。いつかは父を抜かして、自分も人に憧れてもらえるような人格者として、仕事をしたい。

自分の人生で、四十年、五十年と続けていけるような天職を見つけ、自分なりの職業観、仕事に対する姿勢として必要だと思うことを見つけていきたいと思う。いつかは父に、

「謙虚になった。」

と言ってもらいたいと思う。私は、謙虚さ、人、物を大事にする姿勢や、完璧さの中で、まずは所作を一番大切にしていきたい。

海外派遣事業に参加して

墨田区立両国中学校 二年

宮 崎 夏 美

私はこの夏「墨田区中学生海外派遣事業」に参加し、今までになく充実した日を過ごした。この研修を通し、自分の心の中にあつた壁を少し超えられた気がする。

中一の冬、派遣生募集があつた。小学生の頃、子供会のお姉さんがこの事業に参加してオーストラリアに行ったことを聞いて以来、ぜひ参加したいと思っていた。募集が始まったときは胸が高鳴った。しかし、参加は各校男女一名ずつ。応募する理由を書いた希望書を提出し、面接もある。希望する理由を自分に問いかけながら、気持ちを言葉として書いていくことで、どうしても参加したいという気持ちがより高まっていくことを実感した。

参加したい理由は二点あつた。一つめは英会話やコミュニ

ケーション能力を高めて海外の人と自信を持つて会話したいからだ。私は普段人と話すことが大好きだが、海外旅行の経験もなく英会話となると自信が持てなかった。以前近所で道に迷っている外国人観光客を見かけた。しかし、私は声をかける自信がなく、ただ遠くから様子を見ているだけだった。でも通りかかったおばあさんが、英語が話せなくても身振り手振りでコミュニケーションをとろうと一生懸命案内をしていた。私はその姿を見て自分が恥ずかしくなった。英会話に自信がないという理由で海外の人と壁をつくっていた私。そんな自分を克服し、コミュニケーションの一つとして英語を学びたいと思った。

二つめは、海外の文化を学び私の住む両国の街や日本の文化を伝えていきたいからだ。私は父が祭りの会に入っている関係で、幼い頃から祭りに慣れ親しみ、盆踊りの太鼓も叩いている。この経験を活かして海外の人にも日本や墨田の文化について知ってもらいたいという理由だ。

希望書の選考のあと、面接へ進んだ。面接では、他のみんなも海外派遣へ行きたいという強い気持ちが伝わってきた。私も自分の気持ちを一生懸命に伝えたが、緊張のあまり頭が真っ白になってしまい、何を話したか覚えていない。数週間後、結果が届き海外派遣事業に参加できるといふ報告をもたらした。自分が本当に選ばれたのか信じられない思いと嬉しい思いが入り混じり、涙が出た。わくわくする気持ちと同時に、一緒に面接を受けたみんなの顔が浮かび、選ばれたからには一生懸命頑張らないといけないと強く思った。

いよいよ五月から事前研修がスタートした。二十名の派

遣生と初めて会い自己紹介をした。皆はきはきと上手に話し、私はこの中でやっていけるのかと少し不安になった。そして、新型コロナウイルスの感染拡大により、私たちのオーストラリアへの派遣は今年も叶わず、TGG（東京グローバルゲートウェイ）へ国内英語体験となると聞いた。本当に残念で落ち込んだ。しかし、派遣生は「じゃあ日本で頑張ろう!」とみんな笑顔だった。私も下を向かず一緒に頑張りたいと思った。

事前学習では、研修のスローガンを決めた。今年は「Sunflower」に決定した。「Sunflower」、ひまわりの花が明るい太陽の方を向いてすくすくと育つように、私達もコロナ禍の中でも明るい方を向いて成長していこうという願いが込められている。実はこのスローガンは私が提案してみたものだった。自信がなかったが、自分の好きなひまわりの花をモチーフに提案したところ、皆に好感触で、決まったときはとても嬉しかった。

研修を重ねていくうちに私たち派遣生の仲は深まり、研修で皆に会えることが楽しみになっていった。TGGでは、四泊五日、五十カ国以上の外国人の講師・スタッフによって様々なシチュエーションに応じて英語を学ぶことになるそうだった。みんな日が近くなるにつれ楽しみな様子だったが、いったん収まりつつあったコロナが急拡大し、本当に行けるかどうか心配になった。

いよいよ当日。コロナはまだ拡大しつつあったが、全員体調も良く宿泊研修へ行けることになった。TGGでの体験は本当に海外に留学したような臨場感を感じた。オール

イングリッシュのシャワーを浴びて自分の耳がどんどん英語をキャッチできるようになったことに驚くと同時に、自分も英語で話したいという気持ちが溢れ、エージェントや派遣生との英会話がとても楽しかった。英語の学習だけでなく、研修を共にした派遣生との仲も深まり、ホテルでの食事や部屋でのひと時も、楽しすぎてまだ何日も研修を続けたい思いだった。

事前研修、TGG宿泊研修を通して、私は海外の人に対する心の壁や、自分の自信のない弱い気持ちを超えられたと感じる。自分自身、こんな短期間で成果を感じたのは初めてだ。コロナで海外派遣事業が中止となる区が多いなか、墨田区の教育委員会の方々や引率してくださった先生方、両親、そして派遣生たちのおかげでこのような貴重な体験ができたことに改めて感謝したいと思った。またこの研修で学んだことや経験したことを学校で伝えたり、皆が海外への興味や関心が高まるように発信していきたい。コロナが収まって、外国人観光客がまた両国の街に来るときに備えて、今度こそは自分から積極的に話しかけて道案内ができるようにしたい。そして英語ボランティア等の活動に参加して、海外と墨田区の架け橋となれるよう力になりたい。夏休み以降も事後研修が続く、今度は研修発表会がある。学んだことを伝えたり、自分や誰かのためにこの経験が活かせるように努力していきたい。



失敗から学んだ「ものづくり」の喜び

町田市立真光寺中学校 三年

春 山 魁 志

僕は中学一年生の時、技術の授業でガラス細工をしました。クラスメイトと同じように説明を聞き、作品作りに取りかかりました。しかし、僕は早々にクラスメイトより遅れを取ってしまいました。ガラスがなぜか割れないのです。ガラスカッターで何度も傷をつけて挑戦してみますが、ビクともしませんでした。僕は段々イライラしてきて、力づくで割ろうとしました。すると、こうなることは予測できていましたが、やはりガラスが粉々に割れてしまいました。結局、技術の先生に手伝っていたべく羽目になりました。僕はこれ以降、苦手意識が強まり、作品作りが怖くなりました。

中学二年生の技術での作品作りも、順調に進みそうな部分は自分でやりましたが、難しそうだと思う部分は自分で試すこともしないで、すぐに友人や先生に手伝ってもらおうというような、他力本願なやり方をしていました。それによって、大失敗をすることはなくなり、手伝ってもらってできた部分は見栄えが良く、完成度も高く仕上がりが、ホッとはしたものの、なぜかそれほど自分の作品に対して、愛着は湧きませんでした。

そして中学三年生になり、最初の技術の授業は、金属板を使ったキーホルダー作成でした。僕は今年で中学生最後のな

で、気持ちを引き締め、今度こそ真面目に作品を作り上げようと決心して、作品作りに取りかかりました。

しかし、いざ作ろうとしても、もともと手先が器用ではないので、気持ちだけではなかなか上手にできません。金属用のノコギリで切ろうとしても、下書きの線からはみ出して切ってしまったり、逆に今度は線の内側を切ってしまったりと、とても苦労しました。僕はまたイライラし始め、途中で投げ出したくなりましたが、一年生のガラス細工の時と同じ感情であることに気づき、ぐっと堪えて気持ちを静めました。そしてなぜうまくいかないのかを考えてみました。インターネットでコツを調べたり、先生にアドバイスをいただいたりすることで、少しずつノコギリの使い方が上達していききました。そして、お世辞にも美しい仕上がりとはいえませんが、ついに中学三年間の技術の授業で、初めて自分の力で作り上げた作品が完成しました。

僕はこの作品を作り上げたとき、これまでに感じたことのない、「愛着心」を感じました。この感情は、自分の力で作品を作り上げたことに加え、自分自身で考え、試行錯誤を重ねた過程から得られたものだと思います。

僕はこのキーホルダー作りを通して、「ものづくりの喜び」がどういうものなのか、わかった気がします。「ものづくりの喜び」とは、ズバリ、「試行錯誤の楽しさ」と言えるのではないのでしょうか？ 例えば、レトルトのカレーと手作りのカレーを比較してみたとき前者は機械で作られているため、味も画一でブレがないのに対し、後者は毎回、味や見た目にブレが出てきます。しかし、作り手の喜びという視点で考え

中学校の部 佳作

夢と父の存在

中央区立銀座中学校 三年

植松 心音

私はまだ夢が決まっていけない。しかし、数ある夢の中から一つ話したいと思う。それは建設業に就くことだ。

ると、後者の方が勝っているでしょう。では、なぜ手作りの方が喜びを感じるのか、それは隠し味を足してみたり、具材の種類や大きさを変化させてみたりと、試行錯誤を重ねて、どうなるか楽しんでいるからではないかと思うのです。

そして、この作文を考えているうちに、僕自身がなぜ今までのづくりを楽しめなかったのかという理由にも気付きました。それは、作品の出来栄だけに目を向けてきたからです。たとえ多少形が悪くても、試行錯誤の経過を経て作り上げた「もの」に対して感じる「愛着心」は、実際に経験してみても初めて味わえるものだとい回気づくことができました。

僕はこの先、技術・家庭科、美術などの実技科目の授業や、大人になった後も、ものづくりをする機会がたくさんあると思います。その時は今回の経験を活かし、出来栄の良し悪しだけに固執せず、自分なりの試行錯誤を楽しみながら、ものづくりに励んでいきたいと思っています。

私の父は建設業を営んでいる。建設業と言われて皆さんが思いつくのは木材を切ったり、組み立てたり、家の設計図を描いたりといったところだろう。私も小学校高学年になるまで正直なところ興味もなかったし、難しい話だったので父は家を作っている人だ、というようにしか理解していなかった。父は建設業の中でも鳶職というものをしてらしい。鳶職は調べてみると、江戸時代から続いている伝統ある職業であり、高所を動き回るため「現場の華」とも呼ばれていて、専門性の高い技能職であると知った。仕事内容としては仮囲い、足場の組み立て、エレベーター・タワー・クレーンの組み立て、鉄骨建方がある。一般的な鳶職の作業である鉄骨建方はクレーンでつるされた鉄骨を誘導し、組み合わせで構築することだ。その際にボルトと鉄骨を緊結、溶接する技術も使われている。

基本的に鳶職は、高層マンションや大型の建造物などの高所を仕事場に行っていることに加えて大型重機を取り扱うため、少しの指示や動きのずれがあつたら命の危険を伴う事故が起きてしまう危険な仕事でもある。鉄骨に潰されて足の指をなくした人や、重機に挟まれて命を落としてしまった人がいると聞いた時はとても怖かった。世間の意見として、建設業界はきつい、汚い、危険といったイメージをもつ人が多く、若者、ましてや女性ほとんどいない。勿論他の仕事と比べるものすごい体力と集中力が必要とするため、積極的に働きたいと思う人は少ないかもしれない。では何故この仕事を選んだのか、父に聞いてみると

「東京タワーを建てたのは鳶だと知って、カッコいいと思っ

たから。やりがいがあるから」と答えてくれた。父は高校を卒業した後すぐに就職。家庭環境の影響もあり、十八歳からこの鷹職を続けて今年で二十六年になる。いくらやりがいがあり、好きだからといっても、十八歳から同じ仕事を続けて、しかも自分の会社を立ち上げるなんて簡単なことではない。私はこんな父の一面をかつこいと思うのと同時にとても尊敬している。そして心を動かされ、建設業に興味を持った。建設業界で働く女性は年々増加しているが、まだ全体の二割に届かない程である。この中で仕事をするのは勇気もいるし、環境的にも肉体的にも楽だとは思えない。しかし、その分やりがいや達成感を大きく感じられるはずだ。

建設業は様々な専門分野の人たちが集まり、上手く連携して、一つの建物を作り上げている。そのため、皆さんが住んでいるマンションや買い物に行く大型ショッピングセンターなども分野に分かれた多くの人々が関わって、協力し、時間をかけてやっと建物が完成しているのだ。この過程を想像してみると、見慣れた景色の中にある建物たちの魅力を感じられるようになった。建築物は素晴らしい。建設業界へのイメージも良くなっていったらいいなと思う。

私は父の姿を見て大切だと思ったことが三つある。一つめは人との関わり、コミュニケーションを重要視すること。具体的には仲間が悩みや不安がありそうだったら、積極的に相談に乗ることで精神面も健康面でも安定して仕事ができるようにサポートすること等だ。二つめは自分の好きなこと、やりがいを見つけること。これがある人となない人では生きる活力に大きな差が出てくると思う。三つめは壁にぶつかっても

継続して頑張ることだ。ありきたりな考え方かもしれないが、私はこれからの生活でも、仕事をする上でもこれらは大切なポイントになってくると思う。

もし建設業に就いたら、まだ少ない女性という壁を越えて活躍し、いずれは父の会社を継ぎたいと思う。今の私にできることは勉強をして多くの知識をつけることだ。私は専門的に学ぶために工業高校への進学も考えている。そして、将来は父のようにやりがいを感じながら楽しく仕事がしたいと思う。

サッカーと夢と仕事

中央区立銀座中学校 三年

齋 藤 優 輝

僕は、四歳からサッカーを続けている。そして現在、千葉県ジュニアユースのチームに三年間通っている。サッカーをしている多くの子供たちは、プロサッカー選手を目指し、日々練習している。僕もまた、その子供のうちの一人である。しかし、怪我をしたり、思うようにプレーできなかつたりしてプロの道を諦める選手も少なくない。

そして僕は、あるプロサッカー選手と話をする機会があった。その選手の話の中で、「プロサッカー選手になることは、東京大学に入るより難しい。」ということを聞いた。それは、僕の生き方を考えさせる大きな一言だった。同時に、その話

を聞くまで、プロサッカー選手になるためには、自分が努力を続けることだけだと考えていた。そのため、この一言は、より自分の将来に暗雲が立ち込めるような一言であった。

そこで僕は、選手以外でサッカーに関われるような仕事を、自分のチームの活動を通して考えてみることにした。まず監督について考えてみた。監督の仕事は大きく二つあり、一つめは、選手との交流を通じて、個性や伸ばすべきポイントを把握したり、選手に合わせた練習メニューを作成したりすることだ。二つめは選手を含めた関係者とのミーティングを重ね、試合に勝てる作戦を考案することである。またその他にも、選手の体の調整だけでなく、精神の調整も仕事となるだろう。つまり、監督という仕事は、チームの活動全てに関わる重要な職業だとわかる。

次にチームの保健係と言えるスポーツトレーナーについて考えてみた。スポーツトレーナーは、スポーツ選手を支える、縁の下の力持ちである。なぜなら、表舞台に立つことはほとんどないが、選手の心身のコンディショニングを整え、常に最高のパフォーマンスを発揮するためには欠かせない役割をもっているからだ。運動能力を高めるための基礎トレーニング指導、競技や練習中の怪我の応急処置、リハビリサポート、試合に向けた心身のコンディショニング調整を指導するのが、スポーツトレーナーの主な仕事である。以上のことから、スポーツトレーナーは選手の心身に寄り添う重要な職業といえるだろう。

そして、僕のチームでは栄養士も務めるフィジカルコーチについて考えてみた。フィジカルコーチの主な仕事は、スポー

ツの現場で選手に対して、筋力や心肺機能の強化、運動能力向上のためのトレーニング指導、フィジカル面を担当することが挙げられる。また、僕のチームでは栄養士も務めていることから栄養学にも詳しいと考えられる。フィジカルコーチは、選手の体の管理を中心とした大切な職業と言えるだろう。また、プロサッカークラブの選手以外の仕事を調べてみたところ、医師、栄養アドバイザー、ポジションごとのコーチ、通訳など様々な種類の専門家たちが集まっていることが分かった。

これらのことから僕はある共通点を見つけた。それは、どれか一つでもその仕事で欠けるとチームの活動が正常にできないということだ。また、この共通点は社会の中でも言い換えることができるのではないだろうか。例えば、政治の仕組みの中に三権分立があったり、病院の役職の中に医者と看護師が支えあったりしていることが挙げられる。このように社会の中でも仕事と仕事の関わり合いは、現代に生きる僕たちの生活を豊かにしてくれる重要なことなのだと思う。

最後に、僕にとつての夢や仕事について考えてみた。今までプロサッカー選手を目指していた僕が、今回の経験を通して、夢とは多種多様な選択肢の中から、自分の中で目標とする仕事を見つけたことだと思った。また、仕事とは、様々な種類の仕事の中で、一つ一つがそれに通ずる職業を支え合うものであり、どれも欠けてはいけない存在だと考えることができた。僕にこのような考える機会を与えてくれたチームスタッフには感謝をしている。

現時点で私は、健康に携わり、誰かを助ける職業を選択し

ていこうと考えている。夢に向かって進んでいく人を支えていきたい。

未来のための一挙両得

中央区立晴海中学校 三年

秩 父 こなつ

「一挙両得」これは、一つのことをすることによって、多くの利益を得るという意味です。私は、家庭科という一つの科目から沢山のことを学びました。それは、他の教科にはできない家庭科ならではの授業の特徴が影響していると思います。

家庭科では、一つの授業の中でも多くの学びがあります。例えば、調理実習の際には、ただ料理の作り方や包丁の使い方を習うのではありません。お皿を洗うときには洗剤はあまり使わないことや、剥いた野菜の皮などはビニール袋ではなく、紙の箱に入れるなど、環境に配慮した工夫を身につけました。それにより、環境のことを考えるきっかけになるとともに、「無駄を作らない」という意識が芽生え、他の授業でも生かすことができました。

また、家庭科は実践的な授業が多いことも私にとって深い学びをもたらしていると思います。実践的な授業というのは、調理実習や裁縫だけではなくありません。お金のトラブルに関す

る授業の時は、授業で習ったことを利用しながら自分たちで悪質商法を撃退するにはどうすればよいかをペアで考え、高齢者でも分かりやすい、使いやすい単語を駆使し「でも」「だって」「だから」のスリーディー作戦で不審な人間を撃退する方法を見出しました。さらに、住まいについての授業では、災害に負けない家にするにはどうすればよいかというテーマに対して、グループごとの条件として、海の近くの場合と山の近くの場合の違いや、家に高齢者がいる場合と幼児がいる場合の違いなど様々な条件に対応するための策を考えました。本校は、本年度から防災を強化する学校となり、防災について常に学校で話し合う機会が多く、防災訓練も実際に被災にあったことを想定しトリアージの勉強もできました。災害や防災について家庭科とリンクして活動することが良い体験になりました。教科書のことを習うだけではなく自分たちで考え、実際にやってみることで新たな視点から物事を考えることができます。それにより、授業が展開していくにつれてどんどん視野が広がっていき、考えも深まっていきます。

さらに、家庭科は学習範囲がとても広いことも大きな特徴です。時には、「これも家庭科で習うの？」と思うようなこともあります。家庭科では、家庭的な内容だけでなく、社会についても学びます。その中で私が驚いたのは、社会における男女格差です。現在の社会では、男女が共に家庭と仕事の両立ができる社会を目指し、豊かな生活を送るための制度が作られています。過去の日本では、結婚後や出産後に仕事を辞めてしまう女性が多く、男性は仕事、女性は家庭という考えが一般的でした。そこで、男性も育休が取れるようになって

たり、男女の雇用機会が均等になったりと、男女が働きやすい環境が出来上がりつつあります。実際に二〇一四年には、第一子出産後の就業継続率は五三・一パーセントまで上昇しているそうです。しかし、今でも多くの課題、政府が推進しているでも実際にその制度を利用できていない状況などまだまだ問題は残っていて、課題解決に向けた取り組みが行われています。私は、この話を聞いて、社会の現状を知るとともに、自分たちの未来について考えさせられました。このように、私たち中学生にとってあまり触れることのない社会についても理解し、学ぶことは家庭科ならではの授業だと思っています。

このようなことから私は、家庭科を通して「様々な社会とのつながり」を学び得ることができました。お金とのつながり、環境とのつながり、家庭とのつながり、人とのつながり。私は人生の中で多くのつながりを持って生きていくと知ることができました。これらは今すぐ生かせることではないかもしれませんが。しかし、自分たちで考え、実践し、学んだことは、私が社会に出たときに必ず役に立つと思います。家庭科を学ぶことで、自分の人生をより豊かにし、将来に生かす。まさに「一挙兩得」です。



技術を学んで

中央区立佃中学校 三年

西脇琉風

小学生のとき、私は図工の授業が大好きでした。また、小さい頃から、ものを作ることが好きで、よく工作をして遊んだりしていました。そして、中学生になって図工の代わりに技術が入ったときに、とても驚きました。正直、図工と技術はあまり変わらないだろうと思っていました。それが想像と全然違ったからです。図工では、テーマに沿って自由に作品を作るといっていましたが、技術では、設計図や説明書に従って作品を作ることが多くありました。設計図や説明書に従って作品を作るといえるのは、思っていたよりもはるかに大変でしたが、それ以上におもしろかったです。

一年生のときに、木工作品を作りました。それが、初めて設計図に沿って作ったものでした。細かく長さを測ったり、新しい機械の使い方を覚えたり、ワックスやニスを使ったりしました。そして出来上がった作品は、お世辞にも上手とは言えませんでした。作るのは楽しかったですが、板が垂直になっっていなかったり、ニスを塗った量が足りなくてざらざらしたりしていました。この作品作りを通して、設計図通りに進めることの大切さや重要さを学ぶことができました。また一つのミスが大きなミスにつながることもあるのだということもわかりました。そのときは、学校の授業だったので、

間違えたところがあっても、あまり問題はありませんでしたが、もしこれが例えば建築物だったらと考えたとき、大変なことになってしまふなと思いました。

二年生のときは、カレンダーを作ったり、ロボットを作ったりしました。カレンダーは表計算ソフトを使って作りしました。本格的に表計算ソフトを使うのは初めてだったのですが、授業を受けながら大体の仕組みを知ることができました。そして、自分の好みのオリジナルカレンダーを作ることができました。ロボット作りでは、「転ばないロボット」というテーマで、動く仕組みについても学びながら、組み立てました。そのなかで、転ばないような工夫をそれぞれで考えて、ロボットにつけ加えました。その授業の最後で班対抗で行った、自分たちのロボット同士を戦わせるゲームのようなものでは、クラスで一位をとることができて、とてもうれしかったのを覚えています。

三年生である今は、情報について学んでいます。学んでいて最初に思ったことは、身の回りのものがコンピュータであふれているなということです。スマートフォンやタブレット、パソコンなどを含めて、毎日使うものにはたいていコンピュータが使われているのだと知りました。情報社会である世の中で、当たり前のように使っているコンピュータなどの仕組みを知ることが、とても大切だなと思いました。大人になって社会に出たとき、情報に関する知識は多い方が役に立つだろうと思うからです。ですから、できるだけ今のうちから詳しくなっておきたいです。また、機械に仕事をとられるとよく聞くので、将来は機械にとられることがなさそうな職

業に就きたいと思っています。

技術の授業で、たくさんのことを学んで気づいたことは、技術で学んだことは、そのまま生活に生かすことができるものが多いということです。ほかの科目では、何に使うのだろうかと、使う場面がよくわからないものが多くありますが、技術の場合は目的や使う場面が明確にあるので、モチベーションが上がります。モチベーションが上がると、作業もはやく進む気がします。私は器用ではないので、上手に作品を作れるというわけではありませんが、作品を作るのは本当に楽しいです。ものを作ったり、情報について学んだりできるので、私は技術の授業が大好きです。もう残りの技術の授業は多くありませんが、楽しんで授業を受けられたらいいなと思っています。

みんなの笑顔

中央区立佃中学校 三年

平 澤 美 宝

人はなぜ働くのでしょうか。ある人は生きていくのに必要な収入を得るためと答えるかもしれません。また、日本国憲法に三大義務の一つとして勤労の義務が定められているからという人もいるでしょう。日本国憲法の第二十七条をみると、「すべて国民は、勤労の権利を有し、義務を負ふ。」と定められています。私たちは、働く義務があるのと同時に、働く権

利を有しているのです。

私は、働く義務を負っていることよりも、働く権利を有していることを大切にしたいと思います。それは働くことを通じて、何らかの喜びを実感したいからです。実際に私と同じように考えている方は多くいるようです。ここで、ある企業が二〇一九年十二月に実施した「働く喜び調査」を紹介します。この調査は、十五歳～六十四歳の働いている男女五四六七人を対象として実施されました。この調査において「働く上で『働く喜び』は必要ですか。」と質問したところ、実に八十八・二％の人が働く喜びは必要であると回答したのです。単に義務だからという理由だけで働くのでもなければ、収入を得るためだけに仕事をしているのでもないのです。多くの人々が、働くことを通じて何らかの喜びを実感したいと思っているのです。

では、人は働いている時に、どのようなことに喜びを感じているのでしょうか。前述の調査では、働く喜びを感じる項目として、次のものが上位に挙がっています。

- 自分の役割があることを確認できたり、自分の居場所があることを実感できたりすること
- 協力してくれる人がいることや、信頼できる人がいること
- 安定的な収入を得られることや、生活していくために必要な収入を得られること
- お客様や職場の同僚の役に立っていること、お客様や同僚に感謝されること、および必要とされること

ここで私にとっての働く喜びは何かについて考えてみたい

と思います。私はこれまでの中学校生活の中で学級委員としての仕事をしてきました。しかし、委員の仕事を引き受けるにあたり、特定の喜びを実感したいというようなことを考えることはありませんでした。結果として、私がしてきた委員の仕事を通じてどんな喜びが得られたのかについて、前述の調査で上位に挙がった喜びの要因に照らし合わせて考えたいと思います。

中学校での委員会での仕事は、収入を得ることを目的としたものではないので、収入を得る喜びはあてはまりません。また、私の場合、自分の役割があることを確認したことで喜びを感じることはありませんでした。むしろ、あれもやらなくてはいけない、これもやらなくてはいけないと、役割が増えるたびにプレッシャーを感じたように思います。そして、協力してくれる仲間、信頼できる仲間に助けってもらったことは何度もありましたが、仲間がいる喜びを感じたいから委員の仕事をしているのかといわれると、それは違っていると思います。

しかし最後に、まわりの友人の役に立っていることや、友人に必要とされると実感することが、私自身の喜びになっていることに気が付きました。このことが、委員としての仕事をこなす上での原動力に知らず知らずのうちになっていたのです。私は学級委員として修学旅行の準備に取り組んできました。修学旅行出発前は、準備に必要な時間が長くなり、部活や塾、学校の勉強との両立が難しく、きついと感じたこともありました。しかし、修学旅行中にクラスの仲間が旅行を心から楽しんで笑顔で過ごしているのを見て、頑張っ

で良かったなと実感することができました。

私はこれから自分の進路を決めなくてはなりません。それは中学校卒業後も続き、どのような職業につくのか、数多くの選択を迫られるのだと思います。そんな時に、自分の周りの誰かを笑顔にできるかを意識して、後悔のない選択をしたいと思います。

新たな学び

新宿区立西早稲田中学校 三年

篠原 暖

中学校に入学した私は「技術」という教科がどんな授業を行うものなのか想像もできませんでした。ただ、小学校には無かった授業というだけで私は魅力を感じていました。

中学校生活で初めての技術の授業。初めての技術科専用の教室。全てが新鮮で、新しいものだったのを今でも覚えています。中学一年生の課題は「木材」を使用して製作するゴミ箱スタンドラックでした。初めのうちは、簡単に作れるものだとは軽く考えていました。けれど、実際に作業の工程に移ると「製作」の難しさを実感しました。初めは、木材に印をつけていく墨付けという作業でした。周りが着々とこなしていく中、私は一人苦戦していました。木に線を引く。単純なような作業ですが、一ミリメートルや二ミリメートルの誤りが大きな失敗となる重要な作業なのです。失敗を恐れ、慎重に

行うあまりに次第に遅れを取るようになりました。段々周りとの差に不安を覚え、焦りを感じるようになった私は、ペースを上げて作業するようになりました。慎重になるのをやめた私は、どの作業においても失敗するようになってしまいました。結局、友人や先生に助けてもらい、期日間近にようやく完成することができました。

私はこの経験から、「慎重になること」の大切さを身をもって実感しました。作品を仕上げるというより、時間内に終わらせることが目標になり、その結果、粗雑な完成品となってしまったからです。

二年生になり、次の課題は植物を育てるというものでした。正直、植物にそこまで興味がなかった私は、何種類かある中で一番育てやすそうなサニーレタスを選びました。初めは面倒臭いと感じていた水やりも、毎日成長を見る度に楽しみに変わっていききました。それから、気にすることもなかった日の当たり方や水の量、温度管理まで行うようになりました。課題である成長日記を提出し、自分が育てたレタスを食べると、不思議と達成感のような感情が湧きました。普段は農家の方が生産したものを購入し、出されたものを食べる、それが当たり前になっていました。けれど、一つの食材を生産するということとは、誰かの手間や時間がかかっていることになります。私はそのことに改めて気付かされました。そして、全く興味のなかった「植物を育てる」ことに楽しみを覚えた私は今、家庭菜園でブルーベリーときゅうりを育てています。今後は蜜柑や苺など、他のものの栽培もしたいと考えています。このように自分の趣味の幅を広げることもでき、とても

良い経験となりました。

そして三年生。私が一番興味のあったプログラミング。最初は基礎的なことから学び、課題としてゲームを作ることにまりました。パソコンで何かを作るということが元々好きだった私は、技術の授業が以前よりも楽しくなっていました。ただ、好きではあるのですが、プログラミングの知識は全くなく、得意というよりはむしろ不得意です。先生の説明を必死に聞いていても全く先に進めないことも何度もありました。けれど、一つの動作をプログラムできたときの喜びは大きく、不得意だから嫌いになることはありませんでした。毎回少しずつできることも増え、ゲームを完成させたときの達成感が大きかったです。

今もまだ得意とは言えません。けれど、好きということには自信を持って言えます。これからも不得意・得意に関係なく自分の好きなことを伸ばしていきたいと思っています。

これまでの中学校での技術は想像以上にたくさんの学びと知識を得られました。どれもが新しく、大人になったら体験する機会も減ってしまうものばかりです。だからこそ、中学生の今、経験してきた一つ一つのことを大切にして、これからの人生観、職業観に生かしたいです。



プログラミングとその学習の重要性

新宿区立西早稲田中学校 三年

内 藤 義 人

スマートフォン、パソコン、ロボット掃除機などの道具。これらは全て百年以上前には存在しなかったが、今や二歳以下の幼児までもがスマートフォンを持つような時代である。私達は、当たり前のように技術革新の恩恵を受けて、今を生きている。道具の動く仕組みなど知らずに。

道具は、なぜ時代ごとに改良されていくのか。それは、道具の仕組みを理解し、課題を見つけたら、直すか新たに作ることを長い年月をかけて繰り返ししてきたからだ。だが、道具が使い易くなるにつれて、つくりは複雑になり、世の中のほとんどの人は、理解はおろか、中身を見る気さえしなくなってしまった。そうなると、世の中の子供や若者が機械にふれたり、機械の仕組みに興味をもつことが減ってくる。世の中がそのような人々で溢れかえることになったら、今私達が存分に恩恵を受けている技術の発展も止まってしまうだろう。

そんな中で、私たちが受けた「プログラミング」の授業は、動くものの仕組みを根本から考えるきっかけになった。プログラミングでは、自分でブロックを動かしてキャラクターの動きや形、色などを指定し、思い通りに動かす大変さを学んだ。また、思い通りに動かせたとしても、先生の提示されたお手本と比べて余分なコードがあったり、全然違ったりと無

駄なく作る大変さも感じた。

そんなプログラミングの授業を受けて私は、プログラミングの持つ「制御」の力に興味をもち、その中で今開発が盛んな「自動運転」について調べてみようと考えた。

少子高齢化による働き手の不足が懸念されている今日の日本。この問題を解決するために導入されているのが、この自動運転技術である。例えば、電車を運転することは高度な技術が必要である。具体的に挙げると、定刻通りに電車を発着させたり、乗客の乗り心地を考慮して、ブレーキをかけたりしなければならぬ。そして何よりも大変なのが、通勤時間帯での運転である。乗客が多いので、加速やブレーキの力が落ちているものの、昼間の時間帯よりも電車の間隔が狭いのだ。昼間の時間帯と比べて、より正確な操作が求められるのだ。しかし、運転士も人間だ。焦りなどでミスをしてしまう。それが事故につながる。誰もけがをしないならまだよいが、悲惨な死亡事故にもなりかねない。

これらを防止するために開発されているのが「自動運転」の技術だ。人の手ではなく、機械が運転するので、不注意や運転ミスによる事故が減る。また、運転士が必要とされなくなるため、運転に費やされていた時間を、体の不自由な方の乗降補助をしたり、窓口の業務に当たったりと、サービスの質の向上につなげることが可能だ。

しかし、現在、都心などの多くの乗客が毎日利用する路線では、必ず運転士が乗務している。「完全」に機械で自動運転できているわけではない。線路の状態や混雑度は変わり続けるので単純な仕組みのプログラムでは、通用しない

のだ。仮にそれに対応できるプログラムが作れたとしても、車内火災や犯罪などの緊急時の安全性や人が運転している時と変わらない乗り心地の快適さの維持などの多くの課題がある。実際に、山手線は二〇一八年から自動運転の実験を行っている、二〇三〇年頃に自動運転のシステムを導入することになっている。私は、実験をして課題を見つけて、直すことを繰り返していけば、前に挙げた課題は、解決されていくだろうと考える。

これまで述べてきたように、今の時代は複雑な機械に対応できる人が少なくなっている中、これからを担う若い世代が「プログラミング」などを習得することは、未来の技術の発展に大きく貢献することにつながるだろう。

また、私たちのように小中学生からプログラミングという技術分野を学習することで、機械の仕組みや社会で使われる技術に興味をもつことができるようになる。それによって、私たちの未来も技術によって豊かなものになるだろうと私は確信している。

憧れた未来

新宿区立新宿西戸山中学校 三年

笹 又 美 椿

薬と消毒液の匂いで満ちた病院内を足早に進んでいく。キビキビと動き、素早く仕事を片付け、患者には明るい笑顔で

診察する。脳の病気のプロフェッショナル、正確で早く終わる手術を行い、患者や家族に笑顔で感謝される。そんな脳神経外科医は私の憧れだ。

私は小学校低学年の頃から医者という職業に憧れている。幼い頃はぼんやりと医者になりたいとは思っていなかったが、中学二年生のときの二つの出来事がきっかけで医者への憧れがますます強くなった。

一つは、秋頃行った職場訪問だ。私の班は学校の近くにある歯医者者に訪問することになった。班員は私を含め二人で、訪問先への質問を考えたり、担当してくださる方への電話をかけたりと、やることが多いからとても忙しい職場訪問だった。もう一人の班員は医者になりたいと勉強を頑張っている子で、手際が良いから、訪問への準備を効率良く行うことができた。今でも感謝している。

訪問の日、私たちは担当の歯医者の方の話をよく聞いていた。今まで抱いていた医者や歯科医のイメージとは異なるお話を聞けて、良い経験になったと思う。職場訪問でお話を聞くことで、新しい発見もあった。

私は医者になるにはひたすら勉強をすれば良いとばかり思っていたが、今回の訪問でお話を聞いて、その考えは間違っていたことに気づいた。担当の方は、「資格をとるための勉強や、医師としての技術の取得は大学生になってからでもできるから、今は学生にしかできないスポーツや遊び、部活動に励んでほしい」とおっしゃっていた。それは、新鮮な考えだった。「患者さんは色々な人がある。機嫌が悪い人だって、怖い人だっている。そういう人を診察するときに、緊張して

話せなかったら、もっと機嫌を損ねてしまったり、正しい判断ができなくなってしまう。だから、人とコミュニケーションをとる、ということはとても大切です。」という担当の方の言葉が、他国の言葉のように感じた。それくらい私にとって新鮮で面白いお話だった。

訪問の帰り道は明るい未来に胸を膨らませながら歩いていた。これから勉強して、たくさんの人と話して、大学に行ってたくさん勉強して、医者になったらたくさんの人を助けて感謝される毎日……。そんなことを班員と話しながら歩いていた。その子は消化器系の医者になりたいと言う。「君は？」と聞かれて当時の私は答えられなかった。医者になりたいとは思っていたが、こういう医者になりたいかはまだ分からなかったのだ。そんなことも考えずに医者になりたいと言っていた自分が急に恥ずかしくなった。

そんな私だが、どのような医者になりたいかが決まった出来事があった。

年が明けてしばらく経った頃、風邪を引いてしまったことがあった。熱のせいで体は熱く、めまいもひどく足元がおぼつかない状態だった。そんな状態で自宅の階段を降りてしまった。階段を降りている間もめまいは続いている。手すりに体を預け震える足を無理矢理動かして一段一段降りていく。あと五、六段で一階に着くというところで足を踏み外してしまった。五、六段と言っても家の階段は一段の段差が大きく、私が落ちたところは床から一メートル以上あった。そこから前のめりに落ちて頭を強打した。そこで意識が朦朧としてきて気が付いたら救急車の中でぼんやりと見た救急隊員

の人たちはみんな一つ一つの動作が素早く、とてもキラキラして見えた。

病院についてからは救急外来センターに運ばれた。中は普通の病棟とは違って、空気が張り詰めていた。そこにいる方々はみな忙しそうだった。私が運ばれたのは午後七時頃で先生はほとんど院内にはいなかったそうだ。結局そのとき私を診てくれたのは脳神経外科の女性の先生で、とても優しい方だった。記憶は曖昧だが、運ばれてすぐ簡単な検査をして、しばらく経ってから脳の精密検査を行うことになった。その時も先生はずっと私の横にいてくれて、優しく声をかけてくだされた。

病院にいたとき、もちろん具合は悪かったが、それよりも先生や他の医者、看護師の方々がとてもかっこよくて、そればかり考えていた。

その日から私の中で「将来の夢」が明確に決まった。それは脳神経外科医になることだ。医者になるには生半可な覚悟だけでは足りない。必死に勉強して、たくさん苦勞して、家族や学校、塾の先生に協力してもらって、それでもなれるかはわからない、とても大変な職業だと思っている。だが、医者というのは私の憧れだ。医者になっている未来を何度想像したのだろうか。

今の私ではとても医者にはなれない。成績も良くないし、精神的にもまだまだ幼い。それでも、きつと待っているであろう憧れた未来に向かって日々努力をしている。

未来へ一歩

墨田区立両国中学校 二年

庭山 絢

将来の夢は何ですか。

小学生のころは、その質問に対して「まだ決まっていな。」と毎回答えていた。すごく好きなことや興味をもっていることがなかったし、将来のことについてしっかり考えることもなかったからだ。将来のことは将来大人になってから考えれば良いと思っていた。中学生になってから、進路についての学習が増えたが、始めは夢について何も書くことができなかった。しかし、中学校でしばらくしている間に、その考えは変わった。

ある進路学習の授業で、将来やりたい仕事や興味のある仕事について調べるとい。う授業があった。いつものように悩んでいると、先生が自分の好きなことなど、身近なもので考えてみると良いと言ってくれた。私はその授業をきっかけに、改めてまず自分の好きなことを探してみることにした。何日か意識してすごしていると、自分が楽しいと思いつながら取り組んでいるものを見つけた。それが、理科の授業だった。

小学生のころから勉強は好きではなく、理科は特に好きではなかった。しかし中学生になって理科の先生に出会い、自分が理科が好きだと気づいた。どの教科の授業も、理解でき

るように取り組んでいたが、理科の授業は、おもしろい、もっと知りたいと興味を持っていて自分がいた。ある授業で実験をしている時に友達が、「理科好きなの？」と聞いてくれて自分が理科が好きなのだと気づくことができた。自分では気づかなかったけれど、その友達には、実験や授業を受けているときの私が楽しそうに見えたらしく、その時初めて自分が理科に興味をもっているのだということがわかった。次の日から、そのことを意識しながら授業をうけていると、確かに楽しい、もっと知りたいと感じた。いつの間にか理科の授業があるたび、友達に楽しかったと言うようになっていた。その出来事をきっかけに、将来のことに対する気持ちが少し変わった。

一年生最後の進路学習の時間に、私は初めて具体的なことを書いた。今の時点の将来の夢の欄に、私はしっかりと、「理科が関係する仕事がしたい」と書いた。まだ具体的な職業名は決まっていなかったけれど、自分が興味をもっていることを生かせるような仕事がしたいと思ったからだ。書くことによって未来へ一歩進めたように感じた。

二年生になって、国語など、様々な教科で将来の夢の仕事について調べるといって授業が増えた。一年生のころとは違い、すぐに調べ始めた。理科が関係する仕事の中で自分が何をしたいのか、私は二年生になってすぐに決まっていた。それが理科の教師だった。

私が理科に興味をもったきっかけは、先生だった。二年生になって授業を受けている間に、自分も先生のようになりたいと思った。理科の楽しさを他の人に伝えたいと思っ

た。中学校に入学した時よりもあきらかに理科の勉強時間は増えたし、自分で疑問に思ったことを調べることも増えた。クラスの中でも理科が得意で、友達に教えることもよくあった。教えている間も私は楽しいと感じたし、人に伝えることがおもしろいとも思った。理科の教師になるという夢は、そんな自分に向いていると思った。その国語の授業では実際に先生に話を聞いて、その仕事に対してさらに興味をもつことができた。

その日から、理科を学ぶことの楽しさが前にも増し、同時にいつか自分も誰かに教えてみたいという思いが生まれるようになり、今では全力で授業を受け、今自分がしてみたいと思っていることがいくつかできるように取り組んでいる。

私はこのように、将来のことについて考えるうえで、気づいたことや考えが変わったことがたくさんあった。先生や友達など、たくさんの方のおかげで気づかされたこともあったし、将来のことについて詳しく考えることができた。何よりも、将来理科の教師になるために努力するという目標を生みだしてくれた。目標ができたからには、しっかりと達成できるようにしたい。だから、私は、これから生活していくなかで、支えてくれている周りの人たちに感謝をもち、全力で夢に向かっていろいろなことをがんばりたい。将来夢がかなうかどうかなんてわからないし、夢が途中で変わることももちろんあるかもしれない。でも今大切なことは、今の自分の夢に向かって努力をすることだと思う。将来自分が何をしようと思う。これからは何事も未来へ一歩ずつ進むことになると思う。これからは何事も未来へ目標を持って一歩ずつ進ん

でいきたい。

そして、今はいつ誰に聞かれようと答えられることがある。将来の夢についてだ。夢がまだないことが悪いわけではない。けれど、夢があるからこそそれに向かって一歩一歩進むことができると思う。夢があることはとても良いことだと思う。だから私は自信をもって答えることができる。

将来の夢は何ですか。

「理科の教師になることです。」

ものづくりのやりがい

墨田区立両国中学校 二年

花井 優太

私は、ものづくりが大好きです。不器用であり上手にすることはできませんが、自分が一生懸命につくり終えた時は達成感が大きく感じられます。それがどんなに下手だったとしても、頑張つてつくったことに変わりはありません。

例えば、自分は様々なおもちゃをつくっているある会社で働いているとします。そこでは、つくるのは全てコンピューターがつくってくれて、私達は、宣伝や広告をつくるだけなんです。このような場合、果たしてこの仕事にやりがいを感じる事ができるのでしょうか。自分はただ広告をつくっていればいい。とても楽な仕事ですが、この仕事は楽しいとは思えません。やはり、自分達でどんなおもちゃをつくるの

か企画したりした方がやりがいを感じられます。自分が企画してつくったおもちゃが売れたり、広告に出たりすると、つくって良かった、また楽しんでほしいと思うことができます。このようにものづくりは生きがいにもつながります。

また、このような事例は他にもあります。自分が工場で何らかの製品をつくるとします。その代表的なやり方として二つあります。それが「ライン生産方式」と「セル生産方式」です。ライン生産方式は組み立てる部品が目の前に流れてきて、作業者は担当する作業を繰り返すため、覚えなければいけない手順や作業量が少なく、負担が軽いです。これに対しセル生産方式は、少人数で最初から最後までづくりあげるため負担が重くなってしまう。しかし、自分だけの力で組み立てるということは、全体を見渡せたり自分なりに工夫することが出来ます。それはモチベーションや技術力を高めた、ものづくりが楽しくなることにつながります。

ものづくりは難しくて悩んでしまうところも沢山あります。でもそれ以上に、自分にもものづくりのスキルが身に付いたり、つくったものが社会で使われるなど、メリットがあり、やってみる価値は沢山あります。そして何より、こうしてもものづくりをすることは楽しいです。

私が住んでいる町、墨田区では、ものづくりの支援が行われています。例えば平成三十年度より区がビルの一部を借り上げて、ものづくりベンチャー用ラボスペースとして転貸しています。その他にも、ものづくりでイノベーションを起こすことを目指し、新しい製品や技術やものづくりコミュニティを創る場所の創出拠点があります。ここでは、「こんな

ものを作りたい」といったクリエイターやベンチャー企業などのアイデアを職人の技術や経験を掛け合わせることで形にします。また、その体験会や交流会を行っています。

その一方で、ものづくりは才能で選ばれると思います、自分は不器用だからものづくりに関する仕事には就けない、そう思ってしまうかもしれません。しかし、ある人は「ものづくりの面白いところは、こうなったらいいなが叶うところで、頭の中にあるものが現実になるのは感動的です。また、こんな世界があるんだと衝撃を受けたり、柔らかな発想でつくることがするのは魅力的でした。」と話していました。だから、とてもやりがいを感じられる仕事だそうです。もし、自分にとって最大の難関が出てきても意志を持ち続けられればいいと思います。例えば、開発経験が不足していて、どのようなものか分からなくても、何が必要になるか、どのパターンが最も良いのかなど常に自分で考え続けられれば、成功することができます。無理と口だけで言っていたら、何も始まりません。そしてあきらめないでその経験で得られたものは、そこできか得られないもので自分を一步進めてくれます。

そもそも、ものづくりとは、簡単に言えば、物をつくることです。当たり前なのですが、ただの形の「物」から、有用な「物」に変えることがものづくりとも言えます。さらに使う人への満足度を高めるため素材を何にするか、安全性や快適性を高めるにはどうすればいいのか、そのようなことを全て考えた上で真のもののづくりと言えます。そして、ものづくりの楽しさは、「物」が作られる場所に立ち会えるところにあります。熟練された作業を近くで見ることにより、知識

や技術を身に付けることができます。そして何よりも、人々の暮らしに役立っているものを自分自身の手で生み出せるのは、ものづくりにとっての最高のやりがいだと思います。

つくることから生まれる喜び

大田区立大森第六中学校 二年

宇都野 璃子

私は今まで、たくさんのモノをつくってきましたが、その度にたくさんの喜びを感じてきたと思います。

例えば、誰かのために誕生日カードを作った時に喜びを感じました。私の家では、私と姉で父や母、祖父母に一から誕生日カードを作って書くことが恒例となっています。画用紙、絵の具、色えんぴつ、カラーペン、クレヨンなど様々なものを使って、その人の誕生日の季節に合ったデザインを考えて作っています。年々作ることができる時間が減ったり、デザインのアイディアが減ってきたりと、少しカードを作ることが面倒臭いこともありました。しかし、本人に渡した時に喜んでもらえたり、カードをほめてくれることでやって良かったなと喜びを感じます。また、ふと家の中を見た時に、私達が作ったカードが飾ってあると、大事にしてくれていたのだと思います、より喜びを感じます。

また、私はお菓子づくりもよくします。ケーキやクッキー、プリンなど作るものは様々です。お菓子づくりに興味を持つ

たきつけは二つあります。一つめは姉の影響です。姉はいつも私達家族にお菓子を作ってくれます。私が小学四年生頃から、段々と姉の手伝いをしていくうちに自分でもお菓子を作るようになりました。二つめはお菓子づくりをテーマにした物語を読んだことです。お菓子づくりをしていく中で成長していく姿を描く、シリーズものの物語なのですが、読んでいくうちにお菓子づくりをやってみたと思うようになりました。私がお菓子づくりの中で一番喜びを感じる時は、作り終わって食べる時です。作っている時も楽しく、喜びを感じますが、美味しく作れると、喜びと共に達成感も感じられ、また作りたいなと思います。

ある日、家庭科の学習で、家で夕飯を作った時にも喜びを感じました。私はその時まで食事を丸々一食作ったことがなかったのですが、とても大変でした。しかし、家族に食べてもらい、美味しいと言ってくれた時はとてもうれしかったです。今考えると、これが作ることの喜びだったのではないかと思います。また、自分が美味しいと言われてとてもうれしかったので、料理を作ってくれる両親などにも、普段から美味しいと伝えていきたいなと思います。

ここまで自分の体験をふり返って書いてきましたが、書いている最中に私は、ものづくりなど、自分の手からモノを作り出す職業の方達はとてもすてきなと感じました。自分も作っていて楽しく、なおかつ人を笑顔にできたとてもすてきなことだと思えます。建築の方や、飲食店の方や、アクセサリーを作っている方々や服を作っている方々、機械を作っている方々まで、ここには書ききれないほど、モノを作り出している職業の方々がいますが、その方々のおかげで自分達の生活が

成り立っているのだと思うと、感謝しきれないと感じました。しかし、モノを作るにあたって苦しいこともあるのだろうと思います。より良いモノを作り出せるようになると練習をたくさんしたり、試行錯誤を繰り返したりと様々なことがあると思います。私もお菓子づくりをしている時に失敗してしまうことが良くあります。しかし、その失敗があるからこそ次に作った時には、上手に作ることができたこともあります。失敗を乗り越えることですばらしいものを作り出せるようになるのだらうなと思いました。

私はつくることから生まれる喜びは、相手を思いやる心から生まれる喜び、好きなものを作る過程を通して感じる喜び、また作り終えてからの達成感からの喜び、誰かに受け取ってもらい、笑顔になってもらえる喜びがあるのではないかと考えました。様々なモノを作り出してくれている人々に感謝しながら、自分自身も何かを作り出して人を笑顔にできる人になれたらいいなと思います。

夢と思い出をくれた職場体験

杉並区立高南中学校 二年

小 島 夏 音

私は五月に配られた職場体験希望書の第一希望の所に「小学校」と書いた。教師を目指していたのではなく、教師の仕事に興味があったのと小さい子が好きだからという理由で小

学校にした。無事に第一希望が通り小学校に行くことになった私は、同じ小学校に行くメンバー三人と一緒に職場体験当日まで計画を立てた。そして迎えた当日。胸が高鳴るのを感じながら小学校へとふみ出した。

一日目、職員室で配られたプリントを見ながら、私は一人驚いていた。三日目の午後、二年生か六年生に授業をしてもらうと書いてあったからだ。その文字を見た他のメンバーも驚いている様子だった。四人で話し合い、私は二年生の授業をすることになった。その日の午後、早速どんな授業をするか考えたが、中々思いつかなかった。まだまだ幼い二年生、どんな授業をしたらいいのか全然分からず、どれだけ考えても良いアイデアは生まれなかった。その日は一日中立って過ごしていたためかなり疲れていて、ほぼ毎日立って過ごしている教師の大変さを思い知らされた。慣れないことをして精神的にも疲れていた私は、帰って二年生の授業のことを考える余裕もなく眠りについた。

二日目は主に授業の見学だった。気になったことは先生に質問したり、時には手伝いもさせてもらった。そして授業の計画を立てる時間になる頃、私は一つの案を思いついていた。生活科の授業で町探検をしていると聞き、考えたのが二年生だけの町作りをしよう！というものだ。生活科で学んだことを生かし、紙で自分達で住みたいと思う町作りをすれば図工みたいで楽しく学べると思った。このアイデアは私が中学校で実際にやったことを少し工夫したもので、少人数クラスだったので一枚の紙に英語で町を作った。しかし二年生は人数も多く、当然英語はまだ学習していないので、班に分か

れてもらって、四人で一枚の紙に小さい町を協力して作ってもらい、最後に全部のグループの小さな町をくっつけて二年生だけの町作りをしてみようという話し合いの結果になった。準備はかなり大変でお手本とスライド作り、必要なものを考えて用意したり説明の仕方を考えたりと少しでも良い授業になるように頑張った。

そして迎えた三日目。直前はかなり緊張したが、ここまできたらやるしかない、と気合いを入れた。授業が始まると緊張して早口になってしまった部分もあったが、皆一生懸命話を聞いてくれて嬉しかった。おしゃべりしている子も少なからずいたが、町作りの話になると皆興味津々だった。そしていよいよ始まった町作り。一枚の紙に四人でどんなお店や施設を置けるか楽しそうに考えていた。お花屋さんや公園、ゲームセンターなど沢山のお店を書いて盛り上がっていた。時間はあつという間に過ぎ、終わりの時間。作ってくれた小さい町をつなげるとにぎやかで鮮やかな二年生だけの町ができた。作った町の説明をしたら、ときには私に小学生の発想力に驚いていた。ドームやタワーを作っている班もあれば零円ショップや零円スーパ―など、自分だったら絶対思いつかない面白いお店があつて感心した。授業の最後、私はある質問をした。少し緊張しながら口を開く。「今日の授業楽しかった人ー?」。すると、沢山の手が挙がり「こういうことと普段はしないから楽しかった!」「またやりたい!」という声が聞こえてきた。その瞬間、私の心は、これまで感じたことないくらい嬉しさと達成感でいっぱいになった。喜んでくれたのが何より嬉しかったし、やって良かったというや

りがいを感じながら笑顔で授業を終えた。

そして、今の私に夢ができた。もちろん教師だ。なるのはとても大変なのは分かっている。しかし、私は職場体験で実際に授業をして、もっと色々なことを教えてあげたいと思っ
たし、生徒達と一緒に学び合って高め合いたい、そう思った。
職場体験で小学校に行けていなかったら、今の夢はなかった
かもしれない。そう思うと小学校を選んで本当に良かったと
思う。職場体験で学んだこと、そして嬉しさと達成感でいっ
ぱいになったあの日のことを忘れず、夢に向かって進んでい
きたい。

ボランティアから学んだ 「仕事」というもの

北区立稲付中学校 三年

三 澤 双 葉

私は人と話すのがあまり得意ではない。しかし、あること
がきっかけでボランティア活動に興味をもち、参加してみた
と思った。

二年前、友人が突然車いす利用者になった。私にとっては
青天の霹靂だった。彼は元気でよくしゃべるリーダー的な存
在だった。久しぶりに会った彼は、私たちが今まで通り普通
に接することに感謝してくれた。私には彼が車いすに乗って
いようが乗ってなかりうが、彼であることには変わらない。

それなのに、彼はそんな些細なことで喜んでくれたのである。

誰かに感謝されると、自分までうれしくなる。自分の周り
の人に優しくすることはもちろんだが、顔を見たこともない、
いわゆる他人という人たちに自分ができることはないか、そ
う思うようになった。

だが、私は人と接することが少し苦手である。そんな時、
夏休みに製作ボランティア活動があることを知り、体験して
みることにした。内容は区内の保育園や高齢者施設、障害
者施設などで求められているものを製作するといったもので
ある。

私が実際に作ったのはお手玉、おままごと用エプロンとお
ままごと用トートバッグだ。これらはきつと保育園に届くの
だろうと思ったら、自分が保育園に通っていた頃の記憶がよ
みがえってきた。エプロンやトートバッグなどは、だいたい
ごっこ遊びで使っていた。だから、人気があつて、みんなで
早い者勝ちで奪い合っていたな、こういうアプリケが女の
子から人気があるだろうな、男の子は少しかっこいい方がい
いかななど、いろんなことが頭に浮かんできた。顔も知らな
い誰かのことを思い、その子が笑ってくれたり、喜んでくれ
たりするのを想像することは、自分が思っていたよりももつ
と楽しいことだった。私は洋裁があまり得意ではないので、
作り方が簡単にもかかわらず、何日も時間を費やしてしまつ
たが、出来上がった作品は満足のいくものだった。洋裁の仕
事をしている人やプロの人には到底かなわない作品だが、そ
れでも私の作ったこの少し不器用な作品が、使ってくれる子
を少しでも笑顔にさせられたらいいなと思った。

他にも、私はある保育園で先生のお手伝いのボランテアをしたことがある。人と接するのが苦手な私も、妹がいるためか小さい子のお世話をしたり、相手をしたりすることは得意だからだ。先生を手伝うボランテアは主に小さい子たちの寝かしつけ、遊び相手になるなどである。その保育園には妹も通っていたので妹のクラスに手伝いに行きたかったが、そのクラスではなく別のクラスに行くことになった。最初は私自身とても緊張していて、もしなじめなかったらどうしよう、役に立たなかったら申し訳ないなどの不安を抱えたままボランテアが始まった。私は、折り紙を苦戦しながら折っていた子に勇気を出して恐る恐る、

「手伝おうか？」

と、声をかけてみた。すると一瞬こわばった表情になったが、すぐに折り紙を差し出してきたので、折り方を説明しながら一緒に折った。作り終えた後、その子は私に一言、

「ありがとう。」

といった。その一言だけで私はうれしくなって、ほかの作品もたくさん作ってあげた。ほかの子たちもどんどん集まってくる、次々と私に話しかけてくれるようになった。最初にあった不安は吹き飛び、ああ、ボランテアってこんなに楽しいんだということが分かった。ボランテアは、した方もうれしい気持ちになるし、された方もうれしくなる。ボランテアというものはいろんな人を笑顔にできるひとつの方法なのだと感じた。

私はこれらのボランテアを通して、ボランテアというのは協力の精神で成り立っているということを学んだ。私の

作った作品は他の作品よりも劣っている。それでも、その作品にかけた思いは決して劣っていないと思うている。保育園でのボランテアもそうだが、仕事というものは自分のためだけでなく、誰かのためにもやっているのだということに気が付いた。自分の収入のためにその仕事をやっているとしても、小説家やパン屋だったら自分の作ったものを誰かに提供することによって受け取った側が笑顔になる。事務やオフィスで働いている人たちも、世界や国に貢献しているだろう。私はまだ子供だから働くということの本当の辛さを知らないし、うわべだけのことしかわからないかもしれない。それでも私は近い未来、自分がおこなうであろう仕事に希望をもっている。

プログラミング学習から得たもの

荒川区立尾久八幡中学校 三年

山下 千加良

三年生の夏、高等専門学校のプログラミングの体験授業に参加した。

そこでは、あるプログラミングアプリを用いて授業が行われた。本来、プログラミングというのは、キーボードを用いて、多くのプログラミング言語を打ち込み製作するのだが、そのとき使用したアプリは、マウスで画面上の部品を動かし組み合わせることで製作するアプリだった。初心者の私は、プログラミングを難しいものだと考えていたが、アプリを使用す

ることで比較的容易にプログラミングすることができた。

体験内容は、モーター制御、光センサー、ライントレーサーのプログラミングだった。モーター制御や光センサーのプログラミングは容易だったが、ライントレーサーのプログラミングは、導入段階でなかなか理解できず、時間内に完成させることができなかった。しかし、この成功と失敗、そして、未完成で終わったということが、私の「ものづくり」への熱意を高めることになった。

その後、技術の夏休みの課題である「スクラッチ」は、必ず完成させて提出しようという意欲が高まり、時間も忘れ、夢中で取り組み、完成させることができた。

この夏のプログラミングの体験授業は、技術の課題に対する熱意や、「ものづくり」の好奇心を高めただけでなく、知らないことに対し尻込みしがちな私の性格に、挑戦することへの喜びも教えてくれた。

「何事も挑戦することが大切だ。」と、今まで繰り返し学校の先生たちに言われてきた。しかし、挑戦したあとの失敗を恥と思い、その恐れから、挑戦することから逃げていた。しかし、中学二年の終わりがら、「来年こそは、自分を見つけて行動を起こそう。」と考えていたことを、一念発起し、腰が重い私が体験するに至ったのだ。今回、体験会を開催してくださった学校にも感謝だが、行動を起こした自分にも偉いと言いたいほど、自分が知らない自分を見つけることができた。

とくに、「ものづくり」を自分が本当に好きだということに気付くことができたことだ。学校の授業のはんだ付けや裁

縫など、賑やかになりがちな授業のなかでも、無口になって、授業が終わりかけていることにも気付かないほどに、集中して取り組んでしまっている。確かに、他の授業より授業の時間を短く感じるほどには、好きだと感じていたが、他の授業という比較対象があったからだという考えもあり、自分のその気持ちをあまり重んじていなかった。

しかし、今回の「休み」を使った授業で、一時間以上夢中に、しかも、失敗をしても、その無限の可能性に諦めようという心が生まれなかったことから、私は本当に「ものづくり」が好きなのだと知ることができた。

特に、このプログラミングは、本当に面白く、もっともつと深い世界を知りたいという探究心をくすぐられた。そして、プログラミングは「順番」であるという考えにも、面白さを感じた。

国語の授業で、文章で相手に分かりやすく伝えるためには、「序論、本論、結論」というように構成に気を付けて述べなければならぬ。」と教わってきたものの、普段、国語の文章を書くような述べ方をしなくても、周囲に話を通じているのだから必要ないのでは、とずっと思っていた。しかし、プログラミングという「順番」を入力することでアプリが指示通り動き、「順番」をたった一つ間違えるだけで、結果が異なるものになり、失敗するという経験をした。これは、会話のなかでも、実は自分が思っているより、相手に伝えたいことが伝わっていないかもしれないと、技術分野の体験から国語の授業内容に発想が至った自分にも驚き、もっとプログラミングには面白さがあるのではないかと、次にプログラミング

が関わる仕事について、調べるようになった。

その仕事は、プログラマー、エンジニア、データサイエンティストなどだ。少し仕事内容としては、理解しきれないものもあったが、それぞれの仕事内容を調べていると、身の回りのほとんどに、プログラムが関わっていることに気付いた。つまり、プログラマーは流行りの仕事ではなく、現代社会において、無くてはならない仕事であり、もしかすると、私たちの世代には、プログラミングの能力は必須なのかもしれないということにも気付き、この業界に益々興味が高まった。

また、プログラミング言語は、世界共通言語、とも言われるそう。ただし、二百以上ある。共通言語なのに二百あるということにも驚きだが、それは、それだけコンピュータの処理速度が上がったりプログラムの規模が大きくなったりしたことに起因する。しかし、共通言語というように、私が製作したプログラミングソフトを、私が全く分からない言語を用いる国の人が活用してくれる可能性があるということである。ものづくりが好きなのは、その製作過程も楽しいものの、完成した作品を人に見てもらいたいという欲求も存在する。しかしながら、現時点で、自分に非凡な才能があるかどうかなど分からない。しかし、プログラムの知識を増やし、無限大の組み合わせを試行錯誤した先に、私のソフトを、「使いやすい」「見やすい」「楽しい」という喜びの目で見られるかもしれないと考え、こんなにも嬉しいことはないと思う。

とはいえ、「プログラマーになる！」という一つの道だけを進むつもりではなく、第一優先は、今回気付くことができ

た「ものづくりが好き」という感情だ。しかし、おそらくどんなものづくりにも、今後プログラミングが欠かせないものとなると確信し、将来のため、能力を身に付けていきたいと思う。

憧れが放つ輝き

調布市立第八中学校 三年

野 口 蓮 香

私は中学校の先生になりたい。しかし、ただなるだけではなく、人として先生としても尊敬され、楽しい学校生活を送れる環境をつくる。私はそんな先生を理想に思い描いている。元々、人からすごいと思われる職業につきたいと思っていた。しかし「すごい」の定義はなんだろうか。そう考えるようになった。結論的に人のため、世のため、そして自分がしたいと思っ、一生懸命輝いている仕事なら、なんでも「すごい」と思うようになった。そういつた中、自分が本当にやりたいことについて向き合っている時に、いつしか中学校生活を通して、教師は憧れの存在となっていた。

授業で時には雑談を。給食のおかわりは一緒にじゃんけん。休み時間にはドッチボールをしてくれたり、困った時には真摯に向き合ってくれる。部活動では暑い中でも負けないくらいの熱き指導。以前の体育祭でも一緒に喜び合い、負けて泣

いた時はクラスに寄り添って共に悲しみを分かち合ってくださった。こういった姿が私の思い出と共にとても輝いて見えた。「素敵だな。」と心の底から本当に感じたことだった。これらは教師という職だからこそ味わえるやりがいだと先生は教えてくれた。

世の中には私が知らないような仕事もたくさんある。そしてそれぞれの職にはそれぞれの良さがある。リモートで父が英語で会議をしているところを見ると尊敬するし、学校の先生も素敵な職業だと思う。仕事をしているところを身近で見ると苦労している様子も見かける。しかしそれよりも、やりがいの方が大きいのだと皆、口を揃えて言う。人によって仕事のあり方は違うが少なくとも私にとっては自分が輝ける、そして多くのことを学べる最高の機会であると思った。

私は最高の環境に恵まれている。良い先生方と出会い、楽しくて充実した学校生活を送ることができ、幸せな中学生だ。だからこそ、先生方から頂いた宝物を私も先生になり、次世代の中学生にも分かち合いたい。その宝物とは愛情や思い出である。

そこで近年、技術革新によりロボットや機械が人間に変わって仕事をしている場面を多々見かけている。いつか学校の先生もロボットになるのではと誰かが言っていた。しかし、ロボットに学校の先生という仕事はできない。なぜなら、愛情や思い出を注ぐことができるだろうか。いや、できないだろう。技術が発達しプログラミングなどで感情を表せるかもしれない。でもその感情は所詮、機械でできたものだ。簡単に言えば偽りのものである。人のぬくもりは人にしか表現で

きない。これはどれだけの時が過ぎようと変わらないことだと思う。今後、効率などを優先し、どんどんロボットや機械に仕事を奪われるかもしれない。しかし、仕事の本質について見極め、人間にしかできないことを考え、仕事を通しやりがいや楽しさを感じていくべきだと思う。

これらのことを全てふまえ、私は教師という憧れの存在を見つけた。友達がわからない問題があり聞いてきた時、教えてあげ理解した時の嬉しそうな顔を見ると私まで嬉しくなる。行事の時、実行委員だったためクラスを引っ張った。皆が楽しそうにしているとところを見るとやりがいを感じた。私はその大切なひとときを色んな生徒と共有し分かち合っていた。また、私は数学が大好きだ。周りには数学が嫌いな人がたくさんいる。だから、私が無理に好きにさせるのではなく、色んなことを通して自ら数学を好きになってもらうようにしたい。

人生は一度きりしかない。しかし、チャンスは何度だってある。私は中学校の数学の先生という将来に向けて突っ走っていききたい。そして何よりも本当に先生になった時、中学校生活の魅力が伝わるよう、自らも残りの中学生生活を楽しみたい。最後に、今の中学校の先生方は憧れの存在で本当に感謝している。将来の夢は描くものではなく叶えるものだ。だから私は今も夢に向かって走り続けていく。



将来の夢

愛国中学校 三年

野口 桜

私の将来の夢は、保育士になることです。保育士は、いつも子どものことを注意深く見る必要があります、とても大変な仕事だと思います。ですが、私は多くの子どもが成長した姿を間近で見たり、子ども達と沢山遊んで幼少期の想い出を作る手伝いをしたりしたいと思い、保育士という仕事を目指しています。

私の母は保育士として働いています。いつも仕事から帰宅すると、仕事の中で子ども達との楽しかったやりとりを教えてくださいます。私はそんな話を聞きながら、「早く保育士になりたい」と思っています。母は様々な年齢の園児と接する機会があり、名前を覚えるなど大変なこともあるそうですが、楽しそうに話してくれる様子が、私にはとてもまぶしく見えました。しかし、大切なお子さんを保護者から預かるのですから、楽しいことばかりではありません。夏の前後は、公園に行く子ども達は多く蚊に刺されてしまう、と母は言います。子ども達は、痒みを我慢できずに掻きむしってしまい、手当てをするのが大変だと言っていました。そして、保護者の方とのやりとりも、子どものことを皆で理解するために大切で、時間を掛けていく必要があると教えてくれました。も

ろろん他の保育士さんとの連携も必要になってくると思います。子どもを育てていくのは、楽しいことだけではなく、沢山の人の協力や相互理解が必要なのだと実感しました。

保育士になれたら、私が今一番楽しみにしていることは、何といっても子ども達と多くの時間関わり、遊ぶことです。インターネットで調べてみると、子どもが大好きで多く接することができると、子どもの成長を間近で感じられること、保護者の方のサポートができることなどが、やりがいとしてまとめられていました。また、もし自分の子どもが生まれた時、保育について深く学んでいたことによって子育てに役立つ知識や情報が既に多く身についているなど、私が考えていなかったことも書かれていて、確かにそうだなと納得していました。

ここで、私がつ保育士という仕事へのイメージを少しまとめてみたいと思います。私は下校中の車内で、時々ベビーカーに乗った赤ちゃんに会うことがあります。寝ている子、泣いている子、楽しそうに笑っている子、とその表情が様々ですが、どんな時にも見ているこちら側は思わず笑顔になってしまふ瞬間があります。それとともに絶対に守らなければいけない大切な存在だと気付かされた瞬間でもあります。その瞬間を最前線で接し続けられる仕事は保育士だと思いました。長い時間や期間、幅広い年齢の園児と関わることで、先ほども述べたように、保護者の方とのやりとりも大切です。保護者の方にとっては、とてもとても大切なお子さんです。時に真剣になったり、悩みを抱えたり、心配になったりする

ことは当然だと思います。私自身はまだ想像することしかできませんが、保育士としてどのように対応すればいいか悩むこともあるのではないかと容易に想像ができます。母の経験を聞いているだけでも、保育士としても真剣に、慎重になる必要があります、とても難しいことだと思いました。母のアドバイスを受けながら、自分だったらどのように行動できるかイメージをおきたいと思います。また、心配ごとを抱えている保護者の方には、しっかりと寄り添うことも保育士には求められることだと思います。ですが、どんな状況でも寄り添えるようにするためには、沢山の経験が必要です。経験を重ねることによって自分に身に付いたことが保護者の方の悩みを軽くできると思うので、「長く保育士を務める」ということは保育士として自分の強みにもなると考えています。

このように保育士は一つとして同じ瞬間がなく、非常にやりがいのある職業だと私は感じています。保育士は、たくさんの人が憧れる職業だと思います。ですが、憧れだけでは就けない、就いてはいけない職業だとも思います。興味のある分野なので、もちろん専門的な勉強をするのも楽しみだなとは思っています。それだけでなく、様々な情報や知識を吸収していかなければならないと考えています。また夢を叶えられたとしても、他の保育士の先輩方に時には力を借りながら立派な保育士になれるよう努力するつもりです。まずは、夢を必ず叶えられるよう、今できる中学・高校での基本的な学習にしっかりと取り組んでいきたいと思っています。



高等学校の部

専修学校の部



中扉デザイン

このイラストは、大空と広大な海で私たちは自由に生きることができること、周りの物で得意なことによって様々な未来を選ぶことができるということを表現しました。また、たくさんの未来を歩んでほしいという思いから、周りにできるだけ多くの種類の物を描きました。

東京都立府中西高等学校

1年 永 良 紫 織

高等学校の部 最優秀賞

技術を持った養豚家を目指して

東京都立瑞穂農芸高等学校 三年

松井 幸生

私は中学生の時勉強が嫌いで、勉強ばかりする普通科の高校よりも実習が多い農業高校に興味を持ちました。そんな時、インターネットを見てみると養豚場の動画が出てきました。動画では「狭いところで一生を終える豚はかわいそうではないですか。そんなところで育ったお肉を食べたいですか。」といった内容でした。私はそれまで動物のことは知っていても、家畜のことはあまり考えたことはありませんでした。寝返りも打てないような狭い空間で一生を終えるのはかわいそうだとは思いますが、本当にそんなひどい扱いを養豚農家の人たちはしているのだろうか疑問に思い、畜産科学科に入りました。動物について学んでいく中で、豚に興味を持つようになり、養豚類型を選択し豚肉を生産するための様々な知識や技術を学びました。そして、三年生となり卒業後は高校で学んだ動物の分野についても少し学んで、将来は動物に携わる仕事に就職しようと考えました。自宅で飼っていたウサギが病気で死んでしまったとき、何もできずにただ死んでいくのを眺めていることしかできなかったことを思い出しました。そこで、そのような動物を助ける動物看護師になる

うと考えるようになりました。しかし、高校で学んだ養豚にも興味はあり、養豚か動物看護師か迷っていた時、先生から「現場を見て本当の仕事を体験した方が将来についてもっと真剣に、具体的に考えられるようになると思う。養豚場にインターンシップに行ってみたら？」と言われました。それで色々迷っていた自分が本当にその世界でやっていけるのか確かめることができると考え、インターンシップに行くことを決めました。

夏休みに先生から紹介していただいた養豚場へ一週間のインターンシップに参加しました。初めての養豚場は、普段見慣れている学校の豚舎とは様々な違いがありました。まずはその生活リズム。朝五時に起床して五時半から八時半までの管理として主に豚への給餌や飼料の混合と調整をします。学校と飼育する数も違うため、この作業だけでも大変な量です。そして、朝食をとって少し休憩をしたらまた作業を再開します。子豚の去勢などの処置を行います。子豚の数ももちろん学校とは比べ物にならない数です。そして子豚は大きくなり一〇kgほどになると出荷します。この他にも飼料原料を工場へ取りに行ったり堆肥の調整などの作業もあります。

インターンシップに行ってみると、それまで自分が想像していた養豚の仕事とは違うことが多くありました。特に細かい作業が多いことに驚きました。養豚に限らず畜産の仕事は力仕事が多いものというイメージがありましたが、実際は子豚の去勢や人工授精など細かな作業が多くありました。もちろん、自分よりも大きな豚の出荷や移動など力作業もあります。しかし、その作業の後には必ず部屋の洗浄や消毒などを

念入りに行います。そして、それら細かな作業には積み重ねてきた経験から身についた早く正確な技術が大切であるということを知りました。また、中学生のころに見た動画の印象とは違い、生産者の方は豚をとっても大切に思いながら扱っていることもわかりました。

このインターシップを通して、仕事をする上での大切なことを学びました。それは自分の体調を管理し、無理をしすぎないことです。この期間、普段と違った生活や緊張から少し体調を崩したこともありましたが、その時、自分が健康でいられなければ仕事も続けられず、いいものを作ることもできないということを感じました。そして、養豚を仕事としてやっていくには楽しいだけではできないことも感じました。

しかし、大変だった以上に、言葉では伝えられないほど毎日が充実していて、一日があつという間に過ぎていきました。そして、将来はやっぱり養豚を仕事としてやっていきたいと強く感じました。この一週間は学校よりも豚に接する時間が多く、ますます豚のことが好きになりました。エサをあげると楽しそうに食べる時や、最初は警戒していて近寄つても来ない豚が徐々に慣れてくると興味津々でこちらを見つめてくる時は心が通じ合ったように感じました。このしぐさ一つ一つがとてもかわいく、日々の疲れを吹き飛ばしてくれるようでした。

一般の人からすればあまりこの仕事については想像もされず、養豚は力仕事が多くきつい仕事のイメージが強いと思います。しかし、私が見た実際の養豚は力仕事もあるけれど一つ一つの細かな技術がその仕事を支えていて、私にはとても

かつこいい仕事と感じ、やはり養豚の世界で将来は働くと強く決意することができました。そして、養豚現場で経験を積み、いずれは自分の養豚場を経営し、自信をもって「おいしい」と言える豚肉を食卓に届けられるようになりたいです。

高等学校の部 優秀賞

真の持続型農業

東京都立園芸高等学校 二年

小林 陽 菜

「地震や津波、台風」。日本は災害が多い国です。私が生まれてから今日までのたった十六年間だけでも嫌というほどその危険性や対策を学びました。農業に関わる方々は、どれだけ災害や防災に詳しいのでしょうか。

昨年の夏、最寄りのお茶屋さんで地域農園の野菜が販売されているのを見かけました。「農業と環境」の授業で習った「地産地消」という言葉を思い出し買ってみると、新鮮で美味しく、家族も大絶賛でした。

ある日、そのお店で農場主の方が野菜を出荷しているところ遭遇し、私は思い切つて声をかけてみました。自分が農業高校生であり、地元の農業について知りたいと伝えたところ、「うちではお手伝いを募集してないけど、この周辺には若い人がやっている農園が多く良い話を聞けるかもしれない

い」「JAの人に話をしておくよ」と言ってくれました。後日、JAの方が紹介してくださったのは、二〇一九年に日野市に新規就農した若い女性の方で、「東京でも近い距離感で畑と食卓がつながって欲しい」、「野菜の一番魅力的な瞬間をリアルタイムで届けたい」という理念で経営をされています。

農園に訪問させて頂くと、水耕栽培でトマト、露地栽培では旬の野菜やブルーベリーなど十六種類以上の品目を栽培されていました。ハウス内には、土が見えず、カメラやセンサーが設置されており、学校の圃場とは違う、未来の農業が広がっているように感じました。この時、彼女は水耕栽培のメリットを、天候に左右されず、AIによる管理農業で知識があまりなくても始められること、そして、環境の負荷が少なくSDGsにつながることで教えてくださいました。

このお話を伺い、私は、水耕栽培は若者を新規就農に導く魅力的な手段だと思いました。日本では、新規就農者の減少により、二〇〇年には約三八九万人だった農業従事者は、二〇一九年には約一六八万人と二十年間で五十七%も減少しています。そんな中でも、AIを活用したスマート農業で彼女は地域で活躍されており、この姿を多くの人に知ってもらうことが農業の魅力向上につながると考えます。

一方で、水耕栽培にもデメリットがあります。それは、災害で断水や停電があったときに野菜の生育に悪影響がでることです。せっかくの魅力的な方法だとしても、その欠点を補うことを考えなければ意味がありません。

私は昨年の秋に「防災士」の講習を受け、農業従事者にも

防災の知識と技術が必要だと感じました。そこで、地元のJAを通じて十五名の方にアンケート調査を行ったところ、「防災士」を持っている方はおらず、資格の存在を知らない方が八十%でした。一方で、「被災後、復旧に時間がかかった」、「農場は一時避難所にもなるため防災の知識は必要」との意見もあり、やはり、これからは農業従事者も災害や防災に興味を持つべきだと思います。漠然とした不安を抱えるのではなく正しい知識を得て、正しく怖がり、対策を立てることが重要なのです。

私は水耕栽培における防災対策として、ソーラーシェアリングの活用を提案します。これは営農を続けながら太陽光発電を行う設備で、災害時にも栽培を続けることができます。また、都市型農業が災害時でも機能することができれば都心への物流を止めることなく農作物を供給できるのです。

ソーラーパネルの寿命は約二十年。もちろん、デメリットもあり初期投資が高いことや機器の故障に伴う修理等の費用が発生することと考えられます。しかし、災害時にも食料供給を続けることができるというメリットや日本の農業、世界の農業の未来を考えた時に、この持続型の農業が必要であると、私は思います。

私たちは春休みからソーラーシェアリングの研究に取り組んでいます。第一段階として、光を好むトウモロコシの栽培を始めました。ソーラーパネルの下でトウモロコシが栽培できれば他の作物の栽培も問題がないはずです。また肝心の電力は、養蜂へ活用します。セイヨウミツバチは日本の気候、特に夏と冬が苦手です。そこで、貯めた電力を使い環境温度

を調整しサポートするのです。まだ始めたばかりですがこの研究を進め、真の持続型農業として、提示できるようにしていきたいと考えています。

私の将来の夢はJICAの活動で発展途上国に行くことです。今高校で行っているソーラーシェアリングのプロジェクトの経験を活かし、大学で災害、防災、農業の知識を深め、JICAの活動としてソーラーシェアリングでの水耕栽培を発展途上国で普及させたいです。同時に、防災教育を行うことで真の持続型農業を完成させます。

私は高校生の中に未来型農業を学ぶことに意味があると思います。なぜなら、私たちが未来の農業を支える農業従事者だからです。

伊豆大島の香り

東京都立大島高等学校 三年

雨 宮 雛恵美

私は香料にかかわる仕事に就きたいと思っています。私が今住んでいる伊豆大島はツバキが有名です。一般的にツバキには香りが無いとされていますが、高校の椿園には香りがするツバキが存在します。大島の特産である椿油以外に、ツバキで新たな商品を増やせたらと考え、思いついたのがツバキの香水でした。私は、ツバキの精油から香水を製造する為に香料のことを調べました。香料について調べてみると、香料

と私達の関係はとても近く、そして深く関係しているか、普段から日常に香りは必要不可欠なものだということに気が付きました。卒業した後も香料のことを調べ、まだ作られていない香りの香水や、精油などを作ってみたいと思うようになりました。

三年生になり、課題研究では「植物の香りについて」をテーマに、様々な実験を行ってきました。課題研究をスタートした四月。まだ遅咲きのツバキが咲く中、本校の椿園で香りのあると言われる品種のツバキの花を手に取り、香りを確かめた際、花びらではなく、香りの基はおしべの付け根だということが分かりました。初めて嗅いだツバキの香りはとても良い香りでした。私は元々香りがあるサザンカの系統で交配された品種よりも、純粋なヤブツバキ系統の方が好きな香りでした。しかし、ツバキは香りの抽出方法がまだ確立されていないことを知り、ツバキで香りを抽出できたら、伊豆大島の産業に大きく貢献できると考えました。

基本的な香りの取り方を調べ、高校にある施設でも可能な植物から香りを抽出する方法としてエタノールにつけて香りを抽出する方法と、蒸留で香りを採る方法を試すことにしました。研究の準備をしているうちに、季節的にツバキの花の時期が終わり、事前に取った花の量にも限界があるので、本校で栽培している香りがある植物や、ツバキの葉など栄養器官で香りが取れるかを研究しました。その他、三原山に自生している植物に香りの原料になるものがないかと考え、三原山に行きました。三原山には様々な大島の固有種の植物が生息していて、五月に調査したときには、

ニオイウツギ、キイチゴやノイバラなどの植物が自生していることがわかりました。花の香りを嗅いでみると、ほんのり香りは感じられましたが、大量に咲いていなかったのので採取して香りを採るということができなかったのですが、香りがある花が咲いているということは身近に感じられたので、学校にも自生しているキイチゴの花が咲いた時に香りを採ることができたら、ツバキ以外にも花で伊豆大島産の新しい特産品ができると思いました。

研究を通じ、色々な植物の香りを採取した中で、良い意味でも悪い意味でも印象に残ったものがあります。一つめはツバキの新芽です。お茶の葉のようにお茶の香りがすると思ったら、想定外のフルーティーな香りで、花の香りに似た物質があると考えました、ツバキには新芽にも香りの可能性があることがわかりました。二つめはグミの実です。実だけにフルーツのような香りかと思ったら、エタノール抽出後、生臭い魚のような残念な香りになりました。香りが本来のものと変化したと考えられます。三つめはバラです。バラは蒸留法で抽出したのですが一滴とるのにとっても時間がかかり、バラの香水が高価な理由がよくわかりました。香りはほんのり甘い香りで一滴でも十分なほどの香りの強さでした。改めて商品を作るのがどれほど大変か実感することができました。

新たな香りの抽出方法の一つとして、学校で飼っている羊の毛刈りをしたときにもらった羊毛があったので、羊毛に香りを移すことができないかと考え、まず香りの強い植物から実験することにしました。ドライフラワーにしたラベンダーを羊毛と一緒に袋に入れ密閉状態で二ヶ月ほど置いておいた

ら羊毛の獣臭が消え、羊毛にラベンダーの香りがしました。羊毛に香りに移ることは分かったので、現在、エタノールや蒸留で抽出した抽出液やツバキのドライフラワーなどで試しています。

私は元々八王子市の出身で、高校から伊豆大島に来ました。農林科の三年間で、地域の特性を理解し、常に新しい考えを出す発想力、探究心や精神力が必要だと学びました。草花の販売実習で、品物を「どう工夫すればお客さんが買ってくれるか」を考え、新製品を試作したり、販売方法を試行錯誤すること、あきらめないで継続する力や、新しいものを考えたり作ったりする探究心、仲間と協力したり助け合うチームワークの重要性を学ぶことができました。

私は伊豆大島で過ごした三年間の経験を活かし、香料会社の入社を目指しています。そして将来、ヤブツバキで香料を作り「伊豆大島の香り」を全国に届けていきたいです。

高等学校の部 佳作

植物に触れて感じたこと

東京都立園芸高等学校 二年

葛 西 花

農業を学ぶ高校に入学し、日常的に植物と関わるようになってから、私は植物の生態に対して様々な疑問を持つよう

になった。そして私はその多くの疑問を解決するために、人間の生活において欠かすことの出来ない植物というものについて、植物の一生について、高校三年間の学習を通して探究し、最終的には学んだことを自分の将来の進路や職業に活かしたいと思った。

私は高校で、園芸の中に分類される野菜や果樹、花卉、盆栽、造園など様々な分野の知識や技術を二年間以上学び、習得してきた。その上でそれぞれの分野の性質は大きく異なり、分野ごとに独立しながら園芸という枠の中で他の分野との繋がりを持っていることを知った。しかしどの分野も、植物という欠かすことのできない大きな要素を中心として営まれている。そのため野菜の授業中に浮かんた植物に関する疑問が、果樹の授業中も頭に残り続け、花卉の授業中も似たような疑問が新たに浮かぶなどということを時々経験した。つまり植物に関する知識や理解を深め、それぞれの分野にどのように応用されるのかを今までの学習を元に繋ぎ合わせていくことで、植物という大きな括りの下に分野ごとの性質を深く理解することができると考えた。

植物の機能について二年間ほど様々な分野の授業を通して学び、感じたことは「植物は機械的である」ということだ。一文で矛盾しているように感じられるが、植物の一生として、種子を植え、発芽し、栄養成長を行いながらある時期になると生殖成長を同時に始め、花をつけ、新たに種子を作り、時間が経つと老化を始めるという植物の一連の成長の流れは野菜、果樹、花卉など植物の分類や利用する用途を問わずに共通している。種類ごとに特徴や成長の時期に差はあっても、

植物はコンピューターがプログラムに沿って機能するかのようになり、多くの植物に共通する成長の一連の流れというプログラムから理由無しに逸れることはなく静かに淡々と成長する。そのため私は「植物は機械的である」と考えた。そして妊娠を避けたり、病気を意図的に予防することが出来る人間と違い、人間が持つような個々の意思が一生の流れに全く働いていないように見える点が植物全体の大きな特徴であり、私を感じた機械的という印象を強めるものだった。

植物を一連の成長の流れから弾き、「機械的でない」成長をさせるものが病気であると思う。害虫や土壌を媒介し感染するものや土壌の状態、環境の影響によるものなど様々な病気があるが、どれも生産の分野では植物に対し大きな悪影響を与えるため、専科の授業では分野別によく見られる病気について必ず説明を受け、レポートなどを通して対処法などを学ぶ。動物とは全く異なる、個々の意識を感じることの出来ない植物の成長というものにおいて病気による植物の状態の変化は唯一「機械的でない」変化であり、私の目にはそれが植物の意思に近いものに映ることもあるほど、病気と植物の関係について興味を持つようになった。

中学生の頃は植物というものを単に「生物のうち動物でないもの」と捉えていた。だが今では動物との関係性や相違点を探すことを面白いと感じるようになり、一生を通して植物について関わり学んでいきたいと思うようになった。そして今私は大学で植物の様々な病気の原因を探り、それによる影響や学校生活の中で生まれた植物に関する疑問について深く学びたいと思っている。植物への印象が中学生から高校生に

なって変化したように、高校生から大学生になり新たな学びを得ることで更に植物への印象を変化させ、より具体的に正確なものにできるのではないかと期待している。

中学生の頃、遠く眺めるだけだった植物という世界の面白さを高校生になって実際に触れて知った。将来は中高生の頃発見した疑問を成熟した思考を持って一つ一つ紐解くことが今時点での私の夢である。夢を実現するため、志望する大学に進学することを第一の目標とし、目標達成に向けて定期テストやレポート制作など、日々の授業での学習を元にコツコツと努力を積み重ねていきたいと思う。

大気汚染対策「マイ植樹帯制度」

東京都立園芸高等学校 二年

田 島 美 優

皆さんは歩道内に咲いている綺麗な花達に気づいたことがありますか？ 特に春先の時期には、パンジーやチューリップやツツジなど色とりどりの花が咲いてとても綺麗です。その歩道内にある街路樹や花や植物が植えられている場所を植樹帯や植栽帯といいます。私は、その植樹帯を積極的に活用することで、街のゴミのポイ捨てを減らしたり、街の空気を綺麗にしたりしたいと考えています。

初めに、植樹帯を活用した、街のゴミのポイ捨ての削減対策について述べたいと思います。私が通っていた中学校への

通学路には、季節毎に色とりどりの花が咲いている植樹帯がありました。看板を見るとボランティアの方々が綺麗に手入れをしてくれていたようです。私は植物が出す自然の色味がとても好きです。通学中に、花が咲いているのを目にすると、その綺麗さに目を奪われ、数秒足を止めて見つめてしまうことも度々ありました。

その通学路は、父も通勤のために通っていました。そして、私とその植樹帯が綺麗でいつも魅了されていることを伝えたところ、父も同じように感じていたようでした。そして、父から「植樹帯に花が植えられて、しっかり手入れされている所は、周りに落ちているゴミも少ないんだよ。こんど登下校するときに確認してみてごらん」と言われました。今まで花の綺麗さばかりに目がいついていて、花とゴミとの関係については気にしていませんでした。

しかし、その後、そのような視点で街の歩道を観察したところ、確かに、植樹帯が綺麗に手入れされ、沢山の花が咲いている場所の周辺には、吸い殻やビニール袋などのゴミのポイ捨てが見当りませんでした。もちろん、手入れをしているボランティアの方々もゴミを拾い綺麗にして下さっていることもあるでしょうが、明らかにその周辺は明るく清潔感があり綺麗な感じがしました。一方で、花も無く、誰も面倒をみていないような荒れた植樹帯の中や、その周りには沢山のゴミが落ちていることも分かりました。その差にとっても驚きました。

そのことから、綺麗な花が咲いていると、人はその場所ではゴミを捨てようという気は起きないのだと感じました。一

方で、手入れされていない植樹帯に落ちているゴミを見るたび悲しい気持ちにもなりました。

実際に、ゴミや落書きが少ないところは犯罪が少ないという調査結果があり、街の犯罪を減らすために落書きを無くしたり、街を綺麗にしたりする取り組みをしている所もあるということをお父さんから聞きました。

そのため、私自身が将来的に何かできることはないか考え、綺麗な花が咲いている植樹帯を街中に増やすという将来の夢を持ちました。そして、その実現のために、それらの専門知識や技術を学べる学校は無いかと調べ、本校に行くことを決めました。

中学生の間は、花や植物に関する専門的な知識はまだ無かったため、父にお願いをし、出勤途中の道や街で見かけた花の咲いた植樹帯の写真を送ってもらい、未来の街のイメージを膨らませていました。更には、祖父母にも協力してもらい、祖父母の家の庭に咲いている季節ごとの色とりどり花の写真を送ってもらったりしています。それらの写真を眺めながら、植樹帯内の花の配置や色のバランスをどのように工夫したら、街を歩く人達の心を癒やし、ゴミのポイ捨ての削減に繋がるかを少しずつ研究し始めています。

次に、植樹帯の活用による二つめの対策である街の空気を綺麗にする空気清浄化について述べます。その通学路は、国道沿いの歩道であったため、車の通行量が多く、車の排気ガスで空気が綺麗ではないと感じる箇所が多くありました。しかし、植樹帯内に緑が多くある場所は、その植物たちが排気ガスなどを吸収し、浄化してくれるのか、他の場所に比べて

空気が綺麗であるように感じたのです。そのため、花が沢山咲いている植樹帯だけではなく、緑が豊かに育った植樹帯もバランス良く配置することによって、空気の清浄化が図れ、通行人たちの健康被害も減らせると考えています。そのような視点で見ると、歩道内の植樹帯は、まだまだ緑が増やせそうな場所がたくさんあることに気が付きました。

私がイメージする街は、緑が豊かで空気を思い切り吸い込んでも気持ちよく、街中に花が咲いていて、それを見た人々が笑顔に溢れているものです。

どのようにすれば、そのような街を作れるのかの方法はまだ分かっていませんが、高校生活を通じて、積極的にその方法を探していき、その夢の実現に近づきたいと考えています。

郷土料理を守り続けるために

東京都立農芸高等学校 二年

川口 紘花

『納豆汁』という料理を知っていますか。おそらく知らない人の方が多いでしょう。

『納豆汁』とは、山形県の郷土料理です。山形県では、食材が不足する冬を乗り越えるための保存食として、納豆を自家製することが珍しくありませんでした。その納豆をすり鉢ですり潰して、山菜、豆腐、いもがら、キノコなどの食材を加えた味噌汁のようなものが『納豆汁』です。昔から『納豆

汁』は、寒い冬に身体を温める汁物として親しまれてきたそうです。

私は毎年、冬休みになると祖父母の住む山形県酒田市に行っています。大晦日には、『納豆汁』を食べます。実は、山形に行って一番楽しみにしていることが、祖母と一緒に『納豆汁』を作って家族みんなと食べることです。私は一歳の頃から毎年、『納豆汁』を作る手伝いをしていました。そのくらい私にとって『納豆汁』は馴染みがあって、思い出が詰まっている大好きな料理です。しかし、私の住んでいる東京では『納豆汁』を知っている人はほとんどいませんでした。それどころか、どんな料理か説明すると「うそでしょ、ありえない」などと言われたこともあります。「こんなにおいしいのにどうしてみんな食べないんだろう」と思いました。

このようなことがきっかけで、私は多くの人に『納豆汁』を知ってもらいたいと思うようになりました。そして、私も馴染みのない地域の郷土料理については全く知らないということに気が付きました。だから、色々な地域の郷土料理について知りたいと思いました。

そもそも郷土料理とは、その地域の産物を活用して風土にあった食べ物として作られています。その中には、多くの歴史や人々の思いが詰まっています。そんな日本の郷土料理を継承していくためには、まず私たちが郷土料理について知る必要があると思います。だから、多くの人に色々な地域の郷土料理を知ってもらいたいのです。

郷土料理を広めるためにはどうすればよいかと考えたときに、問題点は三つありました。

一つめは、「郷土料理はその地域の人しか知らない場合が多い」ということです。私が体験したように、自分に関わりのある地域の料理は知っていたり、食べたことがあっても、全く関わりのない地域の料理は普段食べることがないため、知る機会がないと思います。

二つめは、「郷土料理が食べられなくなっている」ということです。現代は、ファストフード店やレストランなどが増加し、気軽に食事ができるようになったり、コンビニエンスストアやスーパーマーケットなどでもお弁当やお惣菜が買えるようになりました。その影響で、郷土料理を作ることも、食べることも減ってしまったのではないのでしょうか。

三つめは、「そもそも自分の地元の郷土料理を知らないのではないか」ということです。私は小学生の時、給食に出るまでは地元の郷土料理が何なのかを知らなかったし、考えたこともありませんでした。両親の地元の郷土料理は、家庭で食卓に並ぶこともあるけれど、両親の地元と自分が育ってきた場所が違くと、その土地の郷土料理を知る機会はほとんどないと思います。

つまり、「ほとんどの郷土料理は、その地域の人にしか知られていなく、食べる機会が減ってしまった」というのが現状です。

そこで私は、この問題の解決策をいくつか考えました。

まず、現在も取り組まれているように、地元の郷土料理を小・中学校の給食に取り入れるほか、家庭科の調理実習でやることによって郷土料理を知ってもらうという方法があります。子供の頃に見たものや食べたもの、作ったものは、大人

になっても記憶に残ると思います。そこで、郷土料理に対して興味や関心を持ってもらうことで、次世代にもこの伝統料理を引き継ぐことができると思います。

次に、手間がかからずに簡単に作れる商品を販売するという方法です。現代、多くの人にファストフードが好まれるのは、おいしいからという理由もありますが、手軽に食べられるという点が大きいと思います。また家庭でも、わざわざ知らない料理を作るより、いつも食べている料理を作る方が何倍も楽だと思います。だからこそ、手間がかからずに簡単に作れる商品を販売することは、より多くの人に郷土料理を知ってもらうきっかけになると思います。

しかし、このようなことを自分一人の力で行うのは難しいと思いました。そこで、TwitterやYouTubeなどのSNSを利用して情報を発信するという方法が最適だと思います。具体的には、様々な地域の郷土料理の作り方や歴史などを記事にしたり、料理過程を動画にするというものです。この方法なら、小・中学生から大人まで、多くの人に色々な地域の郷土料理を知ってもらうことができると思います。また、自分も簡単に情報を発信することができるため、気軽に続けることができると思います。

しかし、今の私には知らないことが多すぎます。だから今、私がすべきことは、「各地域の郷土料理について知る」ということだと思っています。

そして、いつか必ず実現させます。

私は、それぞれの地域の郷土料理が日本全国に広まってほしいと思っています。そして、時代が進んでも日本の郷土料

理を守り続けたいです。

今はまだ大きなことはできなくても、自分の力でできることから始めてみようと思います。

これからの農業

東京都立農芸高等学校 二年

玉置 藍

私の親は就農していません。ですが中学生から日本や世界の農業の問題点はある程度認識し興味を持っていました。そして高校に入ってから初めて「農業」というものに深く触れています。そこから様々な課題や農業の良いところ、かつこよさ、大切なことを発見しています。

私の感じた農業の良いところは主に二つあると思います。一つめは「楽しいこと」です。普通科目の中には将来どのように役立つのかがイメージしにくい科目もあります。しかし農業科目では「なぜ学ぶのか?」「何を学ぶのか?」が普通科目に比べて明確です。そして専門高校では座学で学んだことが実習ですぐに身に付けられ学ぶことの意義・大切さをより感じられます。そのため、より学習が「楽しい」と思えます。特に今栽培しているナスやピーマンでは、教科書に書いてある図や説明通りでないことのほうが多く、現場で作業をすることが大切だと身に染みて感じます。そしてナス、ピーマンの管理作業中に汗が滴るときがいかに農業高校らしく

て楽しい瞬間です。

二つめは当たり前かもしれませんが「新鮮なものは美味しい」ということです。特に、トウモロコシやエダマメ、キャベツは私が感じたことのないまるで果物のような甘さでした。その時うれしかったことがあります。親に「おいしい」と言われたことです。私は、作った野菜を「おいしい」と言われることが素直にうれしく、何かを生産して人を喜ばせることの大切さを知りました。そして、そのような仕事に就きたいと思うようになりました。

しかし、冒頭で書いたように高校に入って感じた農業の課題があります。

一つ高校に入って感じたことは、捨てるものが存外多いことです。もちろん食用以外の部分を捨てるのはしょうがないと思いましたが。ですが傷がついているものや、傷もついている小さいもの、逆に大きすぎるものなどは販売には回せず生徒が持ち帰ったりしています。そういうものは普通のサイズのものとは比べて調理しても味は変わりませんでした。

農林水産省のデータによると二〇二〇年の農作物の収穫量は一三〇四万五〇〇〇トンでそのうち出荷量は一一二五万八〇〇〇トンでそれを差し引くと単純計算で一七八万七〇〇〇トン（約一三・七％）が廃棄されているのが現状です。もちろん農水産物は工業製品のように同じものを作ることはできません。だからこそ、今日食料廃棄が問題になる中、規格を緩めることはできないのかなと思っています。規格を緩めてほしいと思っっている理由はもう一つあります。食料自給率の問題です。これは高校に入ってから知った

のですが、日本の食料自給率は「カロリーベース」を採用しています。このカロリーベースを採用している国はほとんどありません。しかもカロリーをもとに計算するので、野菜をどれだけ生産しても自給率はほとんど上がりません。しかし私に、自給率の計算方法を変えられるほどの力はありません。ただ小さな声を上げ続けるしかないのだと思っています。そのためにも現在輸入に頼っているものを生産できるような技術を持てるよう次世代の「農」を担う我々がしっかり勉強しなくてはならないなとも感じています。その中の一つが「観察」であると思います。毎日しっかりと「観察」をすればそもそも大きすぎるもの小さすぎるものなどはできません。傷物は上記に比べ減らしにくいですが、なぜこの傷がついたかなどは様々な理由があります。その理由を先生に聞いたりインターネットで調べたりすることは初めのほうで述べた楽しい部分です。

しかし、農業最大の弱点は、はじめに述べた農業の良い所を発信しきれていないということです。最近SNSでの発信や生産者と消費者を直接つなぐサービスが発達してきています。しかし農業人口が減少していく中、農業高校のような若い世代に農業を教えるのはもちろん、それより若い小中学生への教育も必要だと思っています。そのためには高校と近隣の小中学生の収穫体験など何らかのものを通じて就農者の増加を図るべきだと感じます。そのためには我々がしっかり農業の楽しさ、良さを学び、伝えていく力を養っていくことが大切だと感じています。

このように国内の農業は課題が山積しています。それらを

打開できるのは私たちのような若い世代だと思います。この分野に風穴を開けるためにはしっかりと勉強していくことが大切です。そして実習で学ぶ実践力や、情報を発信していく力を育んで、私たちの世代が将来の人々に尊敬されるような世代になれるよう今後も努力していきます。

私の進路、将来の夢

東京都立農産高等学校 三年

磯山 あづ美

私は、将来は食品開発の仕事を行いたいです。なぜなら、高校の「微生物利用」という科目に興味を持ち、微生物を利用して、より多くの食品をより長期保存できるのではないかと考えたからです。

今までは、コンビニエンスストアのスイーツや、レストランのスイーツなどを改善できる食品を開発したいと考えていましたが、最近ではコロナ禍の影響による食生活の偏りを改善できる食品を開発したいと思っています。コロナ禍の食生活でいうと、外食が減り自宅での食事が増えたため、栄養バランスなどは、良くなるはずですが、実際は違います。食事は、ご飯やパンなどの「主食」、肉や魚などの「主菜」、野菜、きのこなどの「副菜」に分けられ、この3つの組み合わせを一日二回以上食べることが、栄養バランスを考えた上で

望ましいとされています。ところが、新型コロナウイルスの感染拡大以降、この組み合わせが減っています。国の調査では、二〇一七年から二〇一九年までは主食、主菜、副菜の、三つをほぼ毎日二回以上食べている人の割合が五十パーセント台後半を占めていましたが、二〇二〇年から二〇二一年では三十六パーセントと大幅に減少していることがわかっています。なぜこのようになってしまったのか。私が考える要因は、複合料理が増えたことだと考えました。複合料理とは、チャーハンや焼きそばなどの、主食、主菜、副菜を一緒に調理したものです。家で料理を作る回数が増え、夜ご飯はしっかり作るけれど、昼ご飯は出来るだけ簡単に済ませたいという人が増えていると考えます。また複合料理は、栄養素が不足したり、塩分も多くなってしまう。私はそんな問題を解決できる食品を開発したいです。他に、日本人の脂質摂取量が年々増えていきます。要因として私は、洋風化が関係していると考えます。沢山の洋食がある中で私は、ジャンクフードに注目しました。ジャンクフードとは、栄養価のバランスを著しく欠いた調理済み食品のことで、高カロリー、高塩分だが他の栄養素であるビタミンやミネラル、食物繊維があまり含まれない食べ物のことです。脂質の過剰摂取による体への悪影響は主に、生活習慣病があり、ジャンクフード発祥地であるアメリカでは、日本の十倍の人が生活習慣病になっています。新型コロナウイルスの感染拡大以降、外食が減少しているのです。比較的安価で沢山の人が人気がありテイクアウトができ、手軽に食べることができるジャンクフードは需要が増えると共に、日本人の生活習慣病にかかる人が増加する

と考えます。

これらのコロナ禍における食生活の偏りの解決策として、私は、和食を多く取り入れることが大切だと考えます。和食は「一汁三菜」という食べ方が基本となっていて、主食はエネルギー源となる炭水化物を多く含む米、三菜は肉や魚、大豆製品など筋肉や血液の材料となるタンパク質、副菜にはお浸し、煮物、和え物などを利用することで体の調子を整えるビタミン、ミネラル、みそ汁からも野菜や海藻類が補えるため、生活習慣病の予防にも役立つ食物繊維も補えます。ですが、毎日「一汁三菜」を作るのは難しい人も沢山居ます。そんな中で、栄養素は変わらず、品質を保ちながら長期保存ができる和食のレトルト食品を増やしていきたいと思っています。

そのために私は、大学に進学し、栄養学と微生物と人の関わりについて、より深く学びたいです。普段食べている食品に微生物が関わっていることは、多くあります。たとえば、味噌はこうじかびという微生物の働きによって作られた食品です。味噌は腐ることなく、長期間保存することができま

す。私は、微生物の力を有益に利用すれば、より多くの食品を、より長期間保存できるようになると考えています。そして私は将来、健康面や長期的な保存ができるたくさんの食品の開発をしていきたいと思っています。そのためにも残りの高校生活では今まで以上に勉強を頑張りたいと思います。



園芸を通してもっと住みやすい社会に

東京都立農産高等学校 一年

菊池 愛利

私は小学生の時から足立区にある塾に通っていることもあり、足立区に行くことがありました。足立区に入ると必ず目にするのがプランターに植えられた草花です。そして、そこには「ビューティフルウィンドウズ運動」という文字が書かれています。私は「ビューティフルウィンドウズ運動」ってなんだろうと思い、調べたところ「美しいまち」を印象づけることにより、「犯罪を抑止する」という運動で、ボランティアによる防犯の見回りなどもあります。その活動の一つは「学校の通路や公園に花を植え、その花を子どもたちの通学時間に草花の手入れをすることで、見守りを行い、花のある街づくりをすること、犯罪をしにくい環境づくりをしていく」というものでした。この取り組みの結果、足立区では犯罪件数が最も多い時から八割も減少したそうです。私は祖父母が岩手に住んでいて、何となく農業をしている地域はのどかで安全なイメージがあったので、実際に関連があるのか調べてみたところ、農村での犯罪率は都会の犯罪率よりも低いということが分かりました。この要因は農村の場合、高齢者が多いことや都会よりも近隣の人々のかかわりが多いこともありますが、農業を通して、命の大切さや他人への思いやりといったところが育まれているからではないかと思いま

す。また、刑務所の出所者の就労支援として農業が注目されているという記事も見つけることができました。実際に職業訓練学校に農業訓練生として学んだ人の二年以内の再犯率は、そうではない人の半分だそうです。記事の中では「土作りから種まき、作物の手入れそして収穫まで、比較的短い期間にコツコツと積み重ねれば成果が出せるという成功体験を積むことが自己肯定感を作り出すことができるから」とこの要因について分析されていました。これらのことから、私は花を育てることは単に町をきれいにしたり、人々の生活に彩りを加えたりするだけでなく、犯罪を減少させ、世の中を良くするものだというを知り、とても驚きました。

葛飾区でも「花いっぱいのまちづくり」という活動が行われていて、私の通う高校も「花壇コンクール」に参加したり、小学校などに花苗を配布したりするといった活動をしています。また駅前にあるフラワーマーケットもこの活動の一環として行っています。しかしながら、こういった活動は、今回の私のように何かのきっかけがないと知られることは少なく、もっと日本全国にこのような取り組みが広がり、多くの人に知ってもらうことができれば、さらに良い国になると思い、どうしたら全国的に広がるか考えてみました。日本では農業従事者が年々減っています。二〇一〇年は農業就業人口が二百六十万人でしたが、二〇二〇年は百五十二万人と百万人以上減っています。これは農業従事者が高齢化していることが原因で、新規の就農人口も年々少しずつ増えています。農業をリタイアする人の数に追いついていないことが原因だそうです。農業に携わる人が少なくなっているとい

うことは、初めに挙げた足立区や葛飾区のような「花のある街づくり」をする人の数もなかなか増えないのではないかと思います。農業は時間に縛られることがあまりないため、会社に勤めるのと違い、自由に時間を決めることができます。これは例えば子育てをしている人など、時間に制約がある人にとっては、選びやすい職業の一つであると思います。しかしながら若い新規の就農人口がまだまだ少ないと思います。私はこの要因の一つが幼少期や学校生活の中で農業や園芸に関わる機会が少ないことにあるのではないかと考えました。実際、私自身も小学校や中学校生活で植物を育てる機会はありません。育てたとしても、アサガオを育てるなど、理科の授業の一環として育てただけで、花が成長する仕組みは理解できませんでした。植物が無事に花を開かせ、花から実になり、そして種から新たな命が生まれるというような感動を感じることはあまりありませんでした。理科の授業として花の成長を知るということは大切だと思いますが、私はそれさえに深めて、植物が芽を出し、成長し、花を咲かせることに對して感動が持てるようにすることが大切ではないかと思えます。

私は将来、保育士になりたいという目標があります。「農業高校に入学したのに、なぜ保育士になりたいのだろう」と思う人もいるかもしれません。もちろん私一人が農業や園芸に携わることで、花のある街づくりをしていくことはできると思いますが、保育士になって、花を育てる楽しさや感動を多くの子どもたちに知ってもらい、その子どもたちが将来的に植物を育てたり、農業に携わったりすることができれば、

私一人ではなく、もっと多くの力が得られるのではないかと
思ったからです。ただ、子どもたちにとって植物を育てると
いうことは簡単なことではないかもしれません。私も入学し
て初めて野菜を育てた時には切っけはいけないうるを切っけ
しまったり、しっかりと誘引ができていなくて茎が下がって
きてしまったり、ちゃんと実がならなかったりと、上手に育
てることができませんでした。しかし美味しそうな野菜が
育ったり美しい花が咲くのを見ることができるようになりた
くさんの喜びを感じるようになりました。私が感じたように
たくさんの子どもたちにも植物を育てることの楽しさ、素晴
らしさを感じて欲しいと思います。それができれば、きっと
将来農業や園芸に携わる人が多くなり、様々な場所で花が育
てられるようになり、足立区や葛飾区のような園芸を通した
気持ちの良い社会づくりをする取り組みが全国で広がって
いくと考えています。そして世界に誇れる日本をアピールして
いくことへの貢献をしていきたいと思っています。

着たい服が着られるように

東京都立農業高等学校 二年

杉 崎 結 愛

自分の夢は二つあります。

一つめは自分のブランドを立ち上げて一人でも多くの人を
笑顔にすることです。

自分は幼い頃から背が高く周りの人より体重も重かったの
で、年相応の服が着られませんでした。サイズの関係上、小
学生なのに中学生が着ているような少し大人っぽい服を着な
ければならなくて、周囲から少し浮いた存在でした。そこか
ら好きだったおしゃれをやめ、無難な白や黒のTシャツに黒
のズボンというような組み合わせがほとんどになりました。
自分はおしゃれをしたいのに出来ないという同じ悩みを
持っている人を一人でも救いたいと思います。

具体的にどのようなことをするのかと言うと、サイズ展開
の幅広い品揃え、小学生と中学生、中学生と高校生、高校生
と社会人と言った微妙な世代間のおしゃれの価値観のズレを
無くし、どの世代も着たいと思ったものを着られるような服
作りをしたいと思っています。また、ジェンダーレスにも力を
入れていきたいと思っています。人々が性別を問わず着たい服を
着ておしゃれを楽しめる服作りと、その環境作りをしていき
たいと思います。まだ男性がスカート履くことに世の中が
慣れていないので、スカートを履きたい男性もためらって履
かないという選択肢に至るのではないかと考えました。女性
の服の選択肢にズボンが加わったように、男性の選択肢にス
カートが入ってもいいと思うのです。

そこで、スカンツや、スカーチョ、袴パンツというような
スカートに見えるユニセックスなズボンを多用化していけば
良いのではないかと考えました。完全なスカートではためら
いが残ると思いますが、スカートのような「ズボン」ならズ
ボンに分類されるので履きやすいのではないかと思います。
このユニセックスなズボンが浸透していけば男性がスカー

トっぽいものを履くことは当たり前となり、やがて長さの様々なユニセックスなスカートが履ける環境を生み出すことができると思います。それが当たり前になってくると、出てくる問題はそれを犯罪に使う人が出てくるということです。それはおしやれを純粋に楽しむ人への冒涇であり、あつてはならないことだと思います。ですから、それを防ぐ環境作りも共に行っていかなければならないと思います。

二つめの夢は長く着る服作りをすることです。

服は、平均すると、一日に大型トラックで一三〇台分の服が焼却・埋立処分され、家庭で廃棄される服は年間四八トンにも及ぶそうです。そのうちリユース・リサイクルされる服は約三四パーセントで、残りは全てゴミとして処分されます。破れたり汚れたりサイズが合わなくなったりして着られなくなったという服だけではなく、まだ着られるけれど新しい服が欲しい、流行が過ぎてしまった、飽きたなどという理由で手放されてしまう服があります。

これを解決するには変化する服があればいいのではないかと考えました。変化する服とは丈を変えることができたり柄が変わったりなど、一つで終わるのではなく、一つで一〇の変化を遂げるような服があれば一着で新しい服が一〇着でき、いらぬ服というものが無くなるのではないかと考えます。

また、着なくなった服をフリマアプリで売ったり、シェアやレンタルを活用し、一人で着るのではなく、みんなで着れば一つの服が着用される機会や期間が増え、廃棄量が減るのではないかと思います。これらのサステナブルファッションで地球に優しい服作りができると考えました。

自分はこれを実現するために本校に入学しました。週に二〜三回ある専科の授業に、最初は分からないことだらけで戸惑いましたが、高校二年生の今、型紙の応用や作れるものの幅が広がり、ものづくりの楽しさを実感しております。

また、以上のことを実現するためにはどうすればいいかを、日々知識を蓄え、それを使って考えることはとても楽しいです。この楽しさを胸に、これからも日々励んでいきたいと思っています。

つくることの喜び・ものづくりの喜び

東京都立瑞穂農芸高等学校 三年

鈴木 小夏

普通科の高校では知り得ない分野を学べる本校。四つの学科の中で私が食品科を選んだのは、以前から食の世界に興味関心を持っていたからだ。テレビの番組で食品工場の様子が映されているのを見ることがや加工食品がどうやって作られているか、気になることが多かった。

中学三年生の頃、本校の文化祭や説明会で食品科がどんなことをするのか知り、入学したいという気持ちが強くなった。文化祭で学校に入ったとき、廊下の展示物や食品科の作った製品を沢山の人が行列になってまで購入しているのを見て、在校している先輩方がきちんと「食」というものに向き合っていることが感じられたからだ。

入学してから私が一番真剣に聞いたのは、食品衛生についての授業だ。「もしジャム作り中に毛髪やまつ毛が入ってしまったら、今回製造したものの全てを処分する」と言われたとき、改めて食品を製造することに対しての安全性を再確認させられた。誰かが口に入れるものを作る以上、それに伴う責任があるのだと思わされた。

初めての実習でも、食品衛生がとても大切であることを学んだ。卵を割るときやボウルの後片づけの時も常に清潔でいるべきだと知った。信頼して食べてもらう分、安定した品質を保つ義務があるのだ。私は、毎日その責任と向き合いながら仕事をしている食品従事者の方々のすごさを改めて感じた。実習中は周りとの連携も必要で、慣れていない分とても大変に感じた。声を掛け合って、お互いの進捗を確認しながら作業していくのは思っていたよりも難しく、一年生の頃は声の掛け合いが出来ずに、先生に注意されることも多かった。しかし、実習の経験を重ねていくことで、どんな時にチームメイトに声をかければいいのかがわかるようになっていった。自分の経験値がそのまま身に付いていっているのが感じられて、私は製造実習で食品を作るのが楽しく感じられるようになっていった。

実習で作ったものを家に持ち帰り、家族にも官能検査を手伝ってもらうことがある。その時、家族と製品のいい点、悪い点の原因を試験区の製造手順から割り出してみたり、良い点をもっと改良してさらに良いものができるのではないかと話し合うのが、まるで実験をしているみたいでとても楽しく感じるのだ。また、自分が作ったものを家族に食べてもらえ

ることが嬉しく思うようになっていった。今までは、実習で食品を作ることが楽しいと思っていたのが、食べてくれる人の顔を通して「美味しく食べてもらって嬉しい」に変化していったのだ。

三年生の文化祭において、食品科で販売する商品を製造販売する製造班になった。販売班になるよりも実際にものを作ったから製造班を選んだのだが、商品の配合割合から自分たちで考えなければならなくて、初めて体験する立場でいつもとは違う見方が必要になっていると感じた。それは「食べる人が喜ぶものは何か」という見方だ。作るものがベーグルと決まった後のフレーバー選びや試作過程は、自分にとって新鮮に思えた。どんな味が食べたいと思われるのか、その味はどれくらい強く感じるのが最適か。「どんなものが求められているのか」を想像して商品の案を練っていくのが難しくあると同時に、楽しく感じるようになっていったのだ。

この心境変化は、私が実習の時に感じたものとよく似ていると思った。作ったものを「美味しい」と食べてもらえることが嬉しく感じるのと、文化祭の準備の過程で求められているものが何か考えるのを楽しく思ったこと。この二つの意識の変化が合わさって、私が文化祭でやるべきなのは、いつもの実習の時のように「作り方を学ぶ」のではなく、「誰かに楽しんで食べてもらえるものを作る」ということなのだと気付いた。

この気付きはきっと、食品製造を仕事にしている人たちの根本的な指針の一つなのだろうと思う。なぜならこれは、私が食品科として、一人の食品従事者として先生方から教えて

いただいた、食品衛生に気を付けて製造するということと繋がっていると思ったからだ。大勢の人が疑いなく楽しんで食べてもらうには、安定した品質の商品を提供する必要がある。日々誰かの口に入るものを作る人たちの意識に自分が少し近づけた気がして、この三年間での成長を感じられた。

私はまだ将来就きたい仕事を明確に決められたわけではない。在校中のいろいろな経験が、未来の私の可能性に直結していると思うているからだ。沢山の経験の数だけ自分が何に對して興味があるのか、どんな仕事にやりがいを感じているのか、新しい一面に気付くことが出来る。今はそんな自分の経験の中でも、特に興味が出た食品栄養分野を目標として、普通科目はもちろん、専門科目の勉強に力を入れている。

本校に入学し、日々たくさんのかことを学んでいる。その過程を通して、私の考える「ものづくり」とは、自分の新たな

食の未来を支える

東京都立瑞穂農芸高等学校 三年

村田 彩羽

「私たちが、これからの食品業界を発展させていかなければならない。」「食に関わる仕事をしていきたい。」「私の目指す進路は、私が高校の中で学んだすべてである。」

私は、世界中で日本人は特に、食に對する意識がしっかりとされていると思う。例えば、「いただきます」や「ごちそうさま」

といった言葉に当てはまる外国語はない。似ているものと言えば、キリスト教の食前の祈りというものがあるが、日本のように食そのものに対するものではない。しかし、「いただきます」や「ごちそうさま」には、食事となった生命（いのち）を頂くことへの感謝、食事に至るまでに携わった人々への感謝が込められている。私はこの感覚、そして風習がとても大切だと思う。

しかし、私はこの現状に對し、意識が今一つ足りていないのではないかと思う。食事への「敬意」はあっても、食そのものに関する「興味」が湧いていないのではないかと考えるからだ。私も、初めからそう考えていた訳ではなかった。確かなのは、高校生活で食品について学んでから、意識が芽生え始めたということだ。

私の通う高校は、園芸や畜産、加工品について学ぶことのできる、農業系の専門高校だ。畜産科については、都内唯一の学校であり、学校の一番の特徴でもある。私の所属する食品科では、食品の製造原理や加工特性、化学的実験などを実習として学ぶ。もちろんこれらは食品科の特色で、生徒たちが憧れを抱く内容である。他にも一年生で学んだことには、「農業と環境」があった。農耕のノウハウ、自然のしくみなど、座学、農作業実習を通して一年間学んだ。慣れないため最初は必死で、楽しいと感じるまでは時間がかかった。しかし、何週間という時を経て、自分たちが播種し、水をやり管理した畑から作物が育ち、収穫した瞬間は、普段感じる倍の達成感があった。家に持ち帰り、調理し、「おいしい」と笑いあって家族と食卓を囲んだ。いつもとちがう感覚になり、これが

生産者の立場なのだった。

他にも、一年生の最初から三年生現在に至るまで一貫して学ぶ分野がある。食品衛生だ。食中毒予防、衛生管理から設備・服装について、食に関わるうえでの「きまり」を学ぶ。爪は短く切りそろえ、既定の作業着とマスク、手袋。家庭で料理をする時と明らかに違う緊張感をまとって、私たちは実習に臨む。素手で作業してはいけない、服や髪を触らない、タオルは必ず持ち、消毒も欠かさない。「きまり」は数も多くな、細かい内容でもないが、衛生においてとても重要な留意点である。食品衛生から、食品には、おいしさ・見た目の前に、第一に「安全」が大事なことだと学んだ。

私たちの危機管理能力も上がるに連れ、実習の難易度も上がっていく。食肉加工の分野に入り、畜産と向き合った。健康管理から飼育、繁殖やライフサイクル。人間と畜産動物との関係を学んだ。酷だのとれる場面もあるのかもしれないが、私たちが生きるために摂取される運命に、深く感謝をしたい。一般常識として当たり前のように教えられることだが、いざ身近に体験し、自分の手で加工するとなると、もっと自身がしっかりしなければと思い直した。

食品科で学び得たことで、私の生活は変わった。成分表示が気になったり、青果や肉類をじっと観察するようになった。気になったことはすぐ調べ、有識者と知り合うことが増えた。何より、周りの人たちが食品にまつわるふとした疑問などを私に聞いてくるようになった。私がそれに答えられるようになる、自然と周りも食品に興味を示すようになった。私が食品を学ぶことで、私とその周りが変わっていったのだ。

と思った。もし、私が食品科にいなかったら、聞かれることも、考えようとしなかったことがあるのではないか。もし食品に関わっていなければ、出会えてもない世界なのではないだろうか。たかが「食」という一つの分野に思えていただろう。「食」は三大欲求のうちの一つでもある。されど「食」なのだ。こんなに重要で大切な、奥が深くおもしろいことを、学習した私たちだけが知っているのは勿体ない。もっと多くの人に「食」の世界を知ってほしい。そう意識し始めた瞬間から、私は将来「食をさらに身近にした社会」をつくっていくためのビジネスをやりたいと思った。

「食」の業界は厳しい。ファミリーレストラン、チェーン店、宅配など、便利で安い飲食店がある中、これから個人経営で成功することは簡単ではない。だからと言って、怯む理由にもならない。むしろ、現在のコロナ禍を利用した計画を、今から立てることができると考えられる。実際、コロナ禍により大打撃を受けた飲食業界も、柔軟にビジネスに改善を加えたところは生き残っている。外出を控えるようになったのなら、それに合わせた商売を。いつか騒動が落ち着いたときにどういった変化が起きるかなど、よく観察し、先を見、どうすれば食と生活をもっと密着させるかを考える。それが今後の大きな課題である。

私が食品科として様々なことを学んでいる中、農業科ではさらに特化した内容を学んでいた。園芸科では、畑やビニールハウスに作物の様子を欠かさず見に行き、畜産科では、動物の命を大切に育てた。就農者以外の高校生がそれを体験することに、大きな意味があると思えた。

もっと農業に興味を持ってほしい。「食」の世界を知ってほしい。豊かなこの国で、農地を増やし、農業を、国防を支え、食のありがたみを謳えるこの国で、ひとりひとりに食に対する意識を強めてほしい。

この確かな希望を持ち、叶えるため、高校三年間の経験を基に、私は進学し、ビジネスを学ぶ。

働くことの喜び

東京都立葛西工業高等学校 二年

水 貝 颯

中学生の頃、スーパーマーケットで職業体験をして、働く喜びを感じた。多くの商品や品物を陳列し、接客などの体験をした。体験を通して、喜びにつながったことが二つあった。

一つには、感謝してもらえたことだ。商品を陳列しているときなどに、お客様に商品の場所を聞かれ、案内した際には「ありがとうございます」と礼を言われ、お客様の要望に応えることができて良かったと思い、頑張ろうという気持ちになることができた。レジ業務の体験の際にも、お客様が会計されたあとに「ありがとうございます」と言われて感謝されることが多くあった。自分では商品のバーコードをスキャンし、袋に詰め、会計処理しているだけなのに、感謝されると最初はとても照れくさく、何やら違和感があったが、帰宅

時には喜びが湧き、職業体験の一日がとても充実した感じを受けた。

次に、やりがいを持てたことだ。商品や品物の陳列の体験では、ラベルなどをお客様に見やすいようにきちんときれいに並べることを学び、教えて頂いたとおりに実践したのちにその棚を見ると「僕が並べたんだよなあ。よしよきれいに陳列できた。」と自分でできたことにとってもやりがいを感じた。レジ業務では、並ばれていたお客様にうまく応対できるだろうかと不安があったが、一人、また一人とおお客様の会計が終わり、並ばれているお客様がいなくなると「ああ、なんとかうまくできた！」と心の中でつぶやきながら達成感を味わった。

さらに、何やら成長を感じたことだ。最初は商品が梱包されている段ボールを開けるのにとっても時間がかかり、商品の陳列が遅くなったり、陳列の際にお客様の買物物の邪魔になったことや次のやるべきことができなかったりとモヤモヤしていたが、慣れてくると段ボールの開封も素早くでき、商品棚への陳列も早く終えることができた。レジ業務ではバーコードの位置がわからない商品があったりするとスキャンするのに時間がかかり、さらにお金のやり取りに時間がかかり、列ができてしまうこともしばしばあった。少しずつ落ち着きを持つようになると、バーコードを素早くスキャンし、お金のやり取りが素早くできるようになり、列ができて長い列にならずに済んだときには、ほっとした。できることが多くなると、自分でもできることがさらに増え、自分の成長や可能性を感じるようになり、仕事に対する意欲が湧いて、職

場体験も楽しく感じるが増えた。

こうした経験、体験から働く喜びを感じる一方で、大変だと感じることもしばしばあった。レジ業務では列ができると急いで商品のバーコードを読み取り、間違いなく会計処理をしなければならなかったためとても忙しく感じた。慣れていないときは、作業のやり方を思い出しながら急いでレジに商品を通し、会計処理するため、脇からじんわり汗が染み出てくるのを感じ、焦りと緊張で逃げ出したい気持ちにもなった。商品や品物の陳列の業務では、お客様の対応と並行して素早く陳列しなければならなかったため大変さを感じた。ときには商品を落とし、傷つけてしまうという失敗もあった。失敗をいつまでも引きずっていると接客などにも影響してしまうため、すぐに気持ちを切り替えて接客しなければならなかった。これがとても大変で、落としたことの罪悪感と焦りから冷や汗が額から落ちるなど、どう表現したらよいかわからないほどのどきどきした感覚だった。働くということの大変さと自分の未熟さを感じずにはいられなかった。

今、私は高校二年生になった。今までは、働くということすら考えたこともないし、まだまだ先のことだと思っていた。みんなと同じように、授業を受け、宿題や課題に取り組み、放課後には部活動にいく。なんとなく、一日一日が過ぎ、空いた時間はゲームなどをして平凡な毎日を過ごしている。そんな私も来年の今頃には、社会人として働くための会社選びと就職活動に励んでいるだろう。コロナ禍で現場見学会や体験行事などは少ないけれど、秋にはインターンシップが二学期に行われる。中学生で体験した苦々しい経験を思い出し

ながら、インターンシップ先でも新たな自分を見つきたい。働くことは、当然、生活のためが第一であるのだろうが、その他方で経験や失敗、ものごとの達成感が自分自身の成長を促してくれることは間違いないと思っている。一つ一つのことがらは、たいしたことのない行動かもしれないけれど働くことの喜びは、いろいろな人との交わりや係わりを通して、苦労したり、感謝されたり、成長したりと実際にぎやかな心のイベントなのかも知れない。そのイベントを自分でしっかりと彩ることができるように、これからも教えを受け、目標を持ち、失敗を恐れずに前進したいと思う。

夢を見つけることが出来た

東京都立葛飾商業高等学校 三年

竹 下 由姫奈

私は、商業高校に入学したことで簿記に出会い公認会計士という夢を見つけることが出来ました。最初は、商業高校ということもあり就職することが出来るという理由で入学し、将来の夢もまだありませんでした。

高校一年生になって義務教育ではなくなり、留年の制度があることや高校まで必ず通わなければならないということではないことを強く受け止めていました。学校に通うこと自体当たり前ではなく、私のために両親がお金を払って通わせてくれていることにとても感謝しています。ビジネスで必要と

なる知識を身につける授業が多くあり、その中でも簿記に興味を持ちました。企業のお金の流れや取引を記録し、一定の期間ごとに決算を行い、報告書にまとめ、経営状況が分かるといった内容です。会社で必ずと言っても過言ではないほど役に立つもので、授業を受けていてすごく楽しい時間でした。家に帰ってもずっと簿記をしている日々が続きました。そのおかげで簿記の成績が良く、二学期に担任の先生が日商簿記検定があることを教えてくれました。初めは、自分が合格出来るのか不安で受験するのを辞めようかと考えていましたが、挑戦してみたいという気持ちの方が強く二月の試験に向けて頑張ろうと思いました。二年生の受験を考えている先輩方と一緒に補習を受けることになりました。まだ知らない簿記の知識がたくさんあり、練習問題の点数も四割程度と合格点には届かずすごく辛かったです。しかし、毎日一つずつ出来ることを増やしていった結果、検定で合格することが出来ました。嬉しいのはもちろんのこと、簿記のことをもっと学びたいと感じました。

高校二年生では、選択科目で「原価計算」を取り製造業に適用される簿記について学ぼうと考えました。毎回学んだことは復習するということを身につけることが出来ました。日商簿記検定二級にもこれを活かして、冬休みには計画を立てて毎日十時間以上勉強し合格することが出来ました。そのときに、簿記の知識を使う仕事に就きたいと考えるようになりました。インターネットを使い調べていくうちに公認会計士という仕事があることに気付き興味が湧きました。公認会計士の主な仕事は、企業の財務諸表が適正に作成されているか確

認する監査業務であり、資格を持っている人にしか出来ない独占業務に魅力を感じました。そこから、大学に進学して公認会計士の資格を取得したいという夢を見つけることが出来ました。

私は高校三年生になりました。今は何をすべきなのかをよく考えてみて、成績を上げることや日商簿記検定一級の試験に挑戦すること、自分の行きたい大学を見つけ受験に向けて行動することが大切だと思いました。自分の夢に向かって積極的に行動することはすごく楽しくて成長するために失敗を忘れずに一つ一つ確実に成長し、何かダメだと感じたらどうしてダメだったのか、自分とも向き合うことがすごく大事だと実感しました。しなければならぬことを明確にすることで行動しやすくなったり、自分には何が足りていないのか分かるようになります。これから自分自身の成長のために続けていきたいです。

私は、商業高校に入学したおかげで進路も将来の夢も見つけることが出来ました。将来の夢も無かった自分が夢を見つければ、積極的に行動するようになったことにとっても驚いています。夢を持つことは希望になったり、どれほど自分自身がその夢にどんな一歩を積み重ねてどれだけ頑張ったのか分かるようになったりします。今、掴んだ夢を手離すことは出来ません。失敗を恐れていたなら何も行動出来なくなってしまう。そうならないために、私は夢に向かって前を見て途中で困難なことがあっても進み続けていきたいです。高校卒業後に進学するというのは、学びたいことがあるからです。私も学ぶ意欲を持って通わせてくれる両親にも感謝をしながら

ら、後悔しないように様々なことに挑戦し、公認会計士にな

私が実習で学んだこと

愛国高等学校 三年

石 丸 莉 菜

私は五月十日から七月一日まで複数の病院で実習させていただきました。そこでは、たくさんの初めての体験をさせていただくことができました。特に印象に残ったのがA病院とB病院での体験です。

A病院での実習は初めてでした。不安を抱えながらも患者様に挨拶をした次の日、患者様のもとに行くと「寝たいから来ないで欲しい。」と言われてしまいました。その後も何度も声を掛けに行きましたが拒まれてしまい、結局その日は電子カルテを見ることができませんでした。その夜、私は自分の何がいけなかったのだろう、とひたすら泣いていました。けれど私は、絶対に諦めたくないと思い、まず患者様について知っていくことにしました。患者様に定期的に声を掛けに行ったり、リハビリテーションについて行ったりと色々なことを試してみました。すると、徐々に会話の時間が増えていきました。会話から夜眠れなくて困っていること、動物が好きだということ、同じ会話を繰り返ししてしまったり、日付を間違えてしまったりすることがあるということなど、多くのことを知りました。また、ほとんどの時間横になっているこ

とに気づきました。このことから、起きている時間が少ないため昼夜逆転してしまい眠れず、認知機能が低下してきているのではないかと考え、病院内の動物を見てまわるちよつとしたクイズをする計画を立てました。「病院内の動物と一緒に見に行きませんか。」と声を掛けたところ、最初は行きたくないさそうでした。けれどそのうち「少しだけならいいよ。」と言ってくれました。すると、患者様が今まで見たことがない笑顔で動物を見つめていました。看護師さんからも「こんな笑顔は初めて見たよ。」と言っていたきました。クイズでは患者様の好みに合わせた問題を出題したところ、真剣に考えながらも楽しんでいただけた様子でした。また、退院に向けて少しずつ起きている時間を増やすことを目標にしました。毎日積極的に声を掛けたり、散歩に行ったりしてできるだけ起きていられるように患者様のもとに行きました。すると、患者様が起き上がって私を待っていてくださるようになり、「一緒に動物を見に行きたい。」と声を掛けてくださったり、日付を間違えることがなくなったりと援助と患者様の成果が見られるようになりました。退院当日、笑顔で手を振り退院する患者様の姿を見ることができました。この経験から私は、患者様をよく知ることは信頼関係を築くための一歩であると学びました。

B病院では今までやってきたことを生かして頑張れば大丈夫、と自分を励まし一生懸命患者様と向き合っていたと思いました。初めは患者様に警戒されてしまい、コミュニケーションをとることさえ難しい状況でした。しかし、A病院で学んだように患者様のことを知るために声を掛けるようにし

たことで徐々に患者様から声を掛けてくださるようになりしました。また、作業療法に行く際に誘ってくださるようになりしました。

閉鎖病棟には初め、少し怖いイメージがありました。患者様と関わる際に私一人になってしまいどうしたらいいかわからず焦りました。けれど気を取り直していつも通り笑顔で接するようにし、一緒に折り紙を折って手遊びができるものを作りました。すると今まで暗かった患者様の表情が笑顔になりました。

私は最初に患者様に拒まれた際、次も拒まれたらどうしようかと不安になってしまい、患者様のもとに行くのが億劫になってしまいました。しかし、指導者さんのご指導もあり患者様に会う機会を増やしたことで信頼していただけたのか徐々に会話の回数や時間が増えていきました。また、少しずつ明るい笑顔が見られるようになりました。そんな患者様の笑顔を見る度、私は言い表すことのできないくらい嬉しい気持ちになりました。この体験を通して患者様に拒まれても関わりを減らしてしまうのではなく、どのような患者様なのか知り、関わり方を見直すことで心を開いていただけると学ばせていただきました。コミュニケーションをとることで患者様がやりたいことを踏まえて援助の計画が立てられたこともよかったです。

私は本当に看護師を目指したいのか、もしかしたら看護師には向いていないのではないかと悩んだこともありましたが、しかし、患者様と関わる中で徐々に笑顔が見られるようになった時、やはり私は人のために働くことができる看護師に

なりたいと改めて思いました。今回体験させていただいたことを忘れず、今後も頑張っていきたいです。

私の夢

愛国高等学校 三年

中 村 柚 香

私には幼い頃からの夢があります。それは人を救える仕事になりたいという単純で漠然としたものでした。アンパンマンやプリキュア、仮面ライダーや戦隊ヒーローが好きだった私にとって誰かを助けることは憧れの存在に近づくことだったのでそのような夢を持つようになったのだと思います。しかし幼い頃に思い描いたようにお腹を空かせた子に顔をあげたり、魔法や技を使って敵を倒したりして人を救うことはできません。現実には人を救うと一口に言っても医療や法律、インターンメントなど様々なところで自分の得意なことや好きなことを活かして人の為になることをする仕事がたくさんあります。とにかく人の為になることをしたかった私は、色々な選択肢がある中でいつからか命に関わり命を救える仕事をしたいと思い、災害現場や紛争地域で活動する救急看護師を志すようになりました。そのため今は高校生のうちから看護の専門的な知識を学ぶことのできる学校に通い、資格試験に向けた勉強や臨地実習を行っています。

五月から六ヶ月にわたる実習が始まりましたが、初めての

経験ばかりで自分の知識不足に落ち込むことや、医療現場の現実を目の当たりにして身が竦むことが多くありました。初めて受け持たせていただいた患者様は認知機能の低下が見られたため、コミュニケーションをとるのに苦労しました。二人目の患者様は症状の悪化に加え、コロナ禍による面会制限でご家族に会えないことがストレスとなり、闘病意欲の低下が見られました。そのためまずは心のケアを行うべきだと考えましたが、具体的に何をすればいいか初めは分かりませんでした。どちらの患者様も入院前は自立した生活を送っていたため、急に動けなくなってしまうたり物忘れが増えてしまったたりしたことを受け入れるのが難しい様子でした。疾患面だけでなく精神面のケアがとても大切だと感じました。学校で習ったことをもとにケアの仕方を考えますが教科書に載っている例はあくまでも例であり、実際は患者様個人に合わせたケアを考えなければならぬためケアの立案がとても難しく、患者様に対して何もできない自分の無力さを痛感したと同時に看護師は私には向いていないのではないかと弱気になり、楽しみにしていたはずの実習が少しずつ辛いものになっていきました。

そんな自分を鼓舞するためになぜ救急看護師になろうと思ったのだろうと改めて考えた日がありました。きっかけはたくさんありますがその中で最も大きいのは幼い頃からたくさん読んでいた本の影響です。なぜ本なのかと思う方が多いと思いますが、本が好きな私にとって本の中の世界は自分の人生の一部とも言え、文字の世界に入ることと登場人物の経験がとても身近なものになるのです。例えば小説の中には身

近な人が亡くなる描写がされているものがあります。もし目の前で事故が起こったならば立ち尽くすことしかできないのではないかと。大切な人が病気になったら自分には何もできないのだろうか。このような現実に起こりうることを自分の将来と重ねて読んでいました。それ以外にも私がよく読んでいたジャンルとしてノンフィクションの作品が多くあります。歴史小説や伝記、自伝をよく読む私にとって過去に日本がしていた戦争や、まだ記憶に新しい自然災害の数々を経験してきた方々の話、今も紛争や貧困で苦しんでいる国や地域の方々の話が文字の世界に入ることでも身近に感じるものとなっています。日本は災害大国と言われるほど自然災害が多い国です。自然災害は防ぎようのないものですが、画面を通して見ているだけでなく現場に行って行動ができる知識や資格があれば自分にも救える命がたくさんあると考えました。そして世界には紛争や貧困により医療が届かない場所がたくさんあります。医療さえあれば救える命がたくさんあることを知り、自分にはまだ大きすぎる夢かもしれないけれど、日本だけでなく世界中の一つでも多くの命を救いたいと思いました。本を通して色々な方々の経験や苦しみを知り、救急看護師を目指すようになったことを思い出し、弱気になっていた気持ちを入れ替えて実習に取り組んでいこうと決意しました。それは救急看護師を志した時よりも強いもので、臨地実習で出会った患者様からいただいたお礼の言葉や看護師のみなさんの背中を見て、看護師のかっこよさや患者様と関わる上でのやりがいを知ることと今まで以上に看護師になりましたという思いが強くなりました。

幼い頃の単純で漠然とした夢が成長とともに形になり、このような経緯で目指し始めた救急看護師ですが、救急看護師にも種類があります。例に挙げやすいのは救急車で運ばれてきた急患の対応をする看護師と、フライトナースといってドクターヘリに乗って現場まで行く看護師です。どちらもドラマや映画で演じられたことで世間にもよく知られています。私が目指すのは自然災害の現場や医療の届かない国や地域に行くことのできる看護師なので、まずはドクターヘリやドクターカーのある救急センターで働くこと、多くの傷病者が出る可能性のある大規模災害や大きな事故の発生直後に現場に行くことのできるDMATと呼ばれる災害派遣医療チームに入ることの二つが目標です。そして、いつか日本の災害医療をより多くの人を救えるように変えたり、世界中に医療が届くようにしたりしたいというのが私の大きな夢です。冒頭で話したように私はヒーローにはなれません。しかし、看護師になることで救える命があるのなら幼い頃からの夢を叶えるために、そして今後出会う患者様のために今できることを精一杯頑張ろうと思います。

看護師を目指して

愛国高等学校 二年

酒井 彩 名

「看護師になることが私の目標です」と自信を持って言え

るようになったのは中学生になってからです。小学生の時、保健室に怪我をした友達を連れて行き、その頃から医療に少しずつ興味と憧れを持つようになりました。そして、中学生の時、患者様を一番近くで支える看護師に魅力を感じ、看護師になりたいと言う気持ちになりました。

私の母は、介護施設で働いており、母からは日々、利用者様の様子や仕事内容などの差し障りのない話を聞きます。看護も介護も人をサポートするという点で共通です。

「高齢者の人々のお世話をするのは大変なことばかりだけれど、利用者様は必ず笑顔でありがとうと言ってくれる。そのことに報われる。」と母はよく話してくれます。

私の曾祖母も人をサポートする助産師をしていました。戦後すぐの混乱時での医療事情について母を通じて聞いていました。このように身近な人から看護に関する貴重な話を聞くことで、少しずつ看護師への夢も膨らんできました。

さらに、近年たくさん放映されている医療系のドラマは夢を後押しするきっかけになっています。医療ドラマと現実には大きな違いがあるということは重々わかっています。しかし、観終わると医療を通して誰かの役に立てる人になりたい、という想いがより強くなります。テレビ番組から影響を受けることは安易な考えだと思われるかもしれませんが、大事なことは憧れや夢を実現させることだと思っています。その為には並大抵な努力では不足だと思っています。とにかく諦めることなく継続すればいつか夢は叶うと信じています。

現在、新型コロナウイルスが世界で蔓延し、多くの医療機関で医師や看護師が不足しています。過酷と言われる勤務に

よる看護師の離職で、病棟の一部を閉鎖せざるを得ない病院があるとも報道されています。ワクチン接種の担い手が、歯科医、救急救命士、臨床検査技師、薬剤師、医学生、看護学生と拡大されてもいるようです。元々、人材不足の病院も多く、感染症の蔓延が追討ちをかける状態になっているようです。

そして今、日本は高齢化が進んでいます。その点でも看護師の需要は高まっていると思われます。私が住んでいる千葉県は、令和七年までの高齢者人口の増加率は、全国で五番目に高い水準になっています。それに伴い千葉県の四年後の看護師は九千人近く不足すると予想されています。私は三歳から千葉県に住んでいます。千葉県の素晴らしさを実感して育ってきました。そんな町の将来が不安な状態に陥っていることがわかり、少しでも助けになることがしたいと思っています。

私には進みたい科があります。それは産婦人科です。命の誕生という幸福が満ち溢れ、生まれたばかりの小さな命に触れることの出来る癒しの多い空間だと思っています。しかし、不妊治療で悩みを抱えている人や流産や死産という厳しい現実直面することもあるでしょう。そんな時の対応の難しさや気持ちの切り替えが大変だとは思いますが、だからこそやりがいのある科だと思っています。

同じ女性としてサポート出来ることもたくさんあり、患者様に寄り添うことが出来ると思っています。曾祖母が助産師だった時代に、家庭での出産が主流で連絡があると自宅まで駆け付け、胎児の心音を聴くための聴診器も筒状の物を使って確認していたと聞きました。医療スタイルや環境は大きく

進歩しましたが、看護師が患者様のために働くということは今も昔も変わりません。幸せなことばかりではありませんが心が満たされる瞬間はたくさんあると思います。だからこそ産婦人科に大きな興味を持っています。

進路に悩んでいる時、本校を知りました。五年という最短期間で看護師資格が得られ、いち早く現場で働くことが出来、社会の一員になれるという所に魅力を感じました。そんな本校を目標に出来たことで、益々看護師への希望は膨らみ、自信を持って自分の夢を語ることが出来るようになりました。

高校に入学した直後は、初めての看護の勉強や実技に驚きと戸惑いを覚えました。同じくらい新鮮さも感じました。新型コロナウイルスの影響で臨地実習が中止になることもあり、思うような授業ができず、歯がゆい思いもしました。しかし、先生方の創意工夫で無事に校内での実習を終えることが出来ました。

まずは、准看護師の資格取得を目指し、その後、正看護師の資格が取れるように強い志で挑みたいと思います。学校を通じて学び、様々な人と関わりを持つことが将来看護師として働く原点になるのだと信じ、日々を大切に過ごして行きたいと思っています。



高校生活半分を経て見据える未来

岩倉高等学校 二年

桜庭 翼

「お互い頑張ろうね！」中学校の寄せ書きのこの一言で夢に向かって進む勇気をもらえています。様々な思いから私は慣れ親しんだ地元の高校へは行かず遠く離れた現在の高校を選びました。そこには小さい頃から実現したいと思っている夢があるからです。それは鉄道の運転士になることです。私にとって人々の安全と安心を運ぶ憧れの存在として長い間心の中にあり、お客さんを第一に考える鉄道業界に携わりたいと強く思っています。

現在の高校には鉄道業界への就職を目指す人が多く集まっています。私は一年半の高校生活を通して、人間関係について二つの全く異なる世界が広がっていると感じています。一つめは趣味が近いため友達との親睦が深い世界、そして二つめは進路が近いため友達がライバルである世界です。学年が上がり就職試験が近づくにつれて、個々の意識が高まり緊迫した空気に包まれています。この二つの世界の中を乗り越えて行くにはどうすれば良いのか、苦悩する日々が続きました。しかしある日、ある出来事をきっかけに解決するためのヒントを得ました。それは駅員さんが笑顔でお客さんに向けて大きく手を振る光景を見たことです。実際にそのとき、駅員さ

んのみならずお客さんも、そして見ている私まで笑顔になってしまふほど幸せで心温かい空間になっていたことを強く覚えています。その後、「誰かを喜ばせたい！笑顔になってもらいたい！」と思った私は相手が自然と笑顔になる行動、すなわちライバルであつても友達として笑顔を届ける行動が大切であると感じました。現在、私は勉強の教え合いや就職のための情報の共有、悩みごとの解決など、夢の実現に向けて友達と互いを高め合うことを心掛けています。人間関係での経験を通して、将来現場に立ちお客さんと接するときに活かすことができるなら嬉しく思います。

また高校での授業の一つにユニバーサルサービスを学ぶ機会がありました。年齢や性別、身体的状況などに関わらず、全ての人へ公平な情報やサービスを届けることをユニバーサルサービスと言います。授業では、社会の一員として自分に出ることで役割を意識するために状況に応じたサポートの方法を学んでおり、学習したことをきっかけに私達が目指すべき世界があることに気付きました。それは、コミュニケーションを図り相手に寄り添う世界です。ある日、視覚に不自由を感じている方の疑似体験をさせてもらう機会がありました。そのときに自らの意思を伝えることや介助者の声掛け、気遣いが大切であることを実感しました。その後、「コミュニケーション能力を向上させたい！率先して行動したい！」と思った私は学校内で積極的に生徒会活動に取り組み、陰の立役者になろうと日々励んでいます。鉄道就職を目指す私にとってこの経験が糧となり、実際の現場でお客さんを目の前にしてサポートをする際に、相手に寄り添う鉄道員として率

先して行動し感謝の言葉を言ってもらえるようになりたいです。そして、専門的な授業から得られる知識や経験が夢の実現へと続く道の一步になることを信じて今後も学習し続けたいと思っています。

一年後には就職試験が始まります。私は就職試験に向けて、普段の日々を大切にします。何気ない一日にも新しい発見や経験をする可能性があるからです。また、そのとき得たものが未来への宝物になるかもしれません。一日を振り返ったときに有意義であったと思えるくらいの充実した日々を過ごし、鉄道の運転士になるという夢への通過点を乗り越えていきたいです。今までの人間関係や授業を通して培ってきたこと、そしてこの先の努力が実を結んで思い通りの自分の姿になることを願っています。ときには辛いことや苦しいこと、夢を諦めたくなくなってしまうこともあるかもしれませんが。しかし、寄せ書きを見れば自分の夢を応援してくれる人がいます。周りの支えを受け、「鉄道の運転士」の実現へ、努力し続けていきます。

冒険の始まり

京華商業高等学校 二年

浅 古 采 碧

私は将来、薬剤師になりたい。そう思ったのは、高校に入學してすぐのことであった。

勉強のやり方も分からず、やりがいも感じられなかった中学生の私は、勉強が大の苦手であった。「なぜ勉強をしなければならぬのだろう。今後何の役に立つのだろう。」勉強に対してそう思っていた私の成績は常にオール三、またはそれ以下だった。特に、数学は昔からできなかった。いや、できないと思い込んでやろうとしていなかっただけかもしれない。難しい問題になると膨大な計算式になるが、その中に物語性はなく、数字が一つ違うだけで問題や答えが全く違うものになる。何より、数学の問題には情緒が感じられない。だから苦手であった。できるようになるために、努力すらもしていなかった。

そんな私に夢を与えてくれたのは、病院の薬剤師さんだ。幼い頃から病院に行くことが多かった私は高校に入學してすぐの頃、いつも通り母と病院に行った。薬が処方されるのを待っている間、母と何気なく交わした話題が将来についてであった。それまで私は、保育士や教師などやってみたいと思っていた職業は沢山あった。しかし、心の底からなりたいたいと思っているわけではなく、どれも軽い好奇心によるものだった。その時、私の目に映ったのは高齢の患者に処方する薬を丁寧に説明している薬剤師さんだ。初めて飲むから不安だと言う患者に対して、「大丈夫ですよ。」と言った薬剤師さんの言葉は、まるで魔法のように感じた。そのたった一言で患者さんは安心したような表情を浮かべていたのだ。薬が嫌いな私も薬剤師さんの説明を聞くと飲める気がしてくる。私はその瞬間、「薬剤師になりたい不安を抱えている患者に安心を与えられる立場の人間になりたい。」と思った。ここから私の冒険は始まる。

た。

薬剤師になるためには、薬学部に進学しなければならない。そして、商業高校に在籍する私にとって、理系の大学を目指すことは、大きな決断であった。しかし、当時の私には薬学部にどうしても行きたいという強い気持ちが芽生えていた。今思えば、勉強に対してやりがいすら感じたことのなかった私が最も苦手とする数学を勉強しようと思ったのは、奇跡のような話だ。そこから母と相談し、塾に通わせてもらうことになった。いよいよ、本格的に夢を叶える準備が始まった。塾の先生は中学の範囲から丁寧に教え直してくれた。高校生活初めての中間テスト。中学の時と同様に、勉強なんて捨ててしまえば楽な話だ。しかし、私は挑戦した。初めて本気で勉強した。分らないところが出てくればその度に学校の先生、塾の先生に聞いて教えてもらった。誰も面倒くさがらず、親切に教えてくれた。それが、とても嬉しかった。自分の中で理解できる問題が一つ、二つと増えていくあの感覚は、一生忘れないだろう。本気で取り組んだテストの結果表には学年四位という文字が並んでいた。驚いた。何かの間違いではないかとまで思った。中学生の時に、全くできなかった勉強で学年上位を取れたという事実は私を変えてくれた。やればできるんだ、そう思うことができた。それから私は沢山勉強した。難しい問題にぶつかった時、以前の私なら問題文も読まずに諦めていたが、今は違う。私は変わったんだ。周りの人の協力で二学期のテストでは学年一位という文字を見ることができた。多くの人が褒めてくれて、自分のような人間でも努力すればできないことなんてないんだと思えて、すごく

嬉しかった。

もう一つ私を変えてくれたきっかけがある。それは、「この問題を教えてほしい。」という友達の一言だ。過去の自分なら勉強を聞かれることなんて有り得ない話だったので、驚いたが、自分の言葉で友達に説明すると分かりやすいと言ってくれた。勉強が大の苦手で、やり方も分かっていなかった自分が他人に勉強を教えている。不思議な感覚だったが、嬉しかった。

二年生になった今、冒険のゴールはまだまだ遠い。しかし、確実に目標に近づいている。心が折れそうになる時もある、何度も諦めようかと思った時もある。それでも私がここまで頑張ろうと思えるのは、友達や先生、家族の応援があるおかげだ。私は伝えたい。どんなにできないことがあると、諦めずに小さな努力を積み重ねていけば必ずできるようになる。そして、夢を持つということが自分自身を変えるきっかけになるということを。辛いことや苦しいことがあっても逃げない。私は将来必ず薬剤師になる。それが私の冒険のゴールだ。

私が描く将来への道

国際公立学園高等専修学校 一年

川井月那

私には、幼い頃からの夢があります。その夢は、パティシエになって自分の作ったお菓子でたくさんの人を笑顔にする

ことです。高校生になった今、夢を実現する為にパティシエという職業に真剣に向き合おうとしています。

まず、私がパティシエという職業に興味を持ったのは、十一年前の夏の事でした。父に連れられ、人生で初めてパティスリーへ足を運びました。店内に広がる甘い香りや、ショーケースに並ぶ、宝石のように輝いているケーキに心を奪われました。当時の私は、幼かった事もあり、ケーキなどのお菓子は甘くておいしい物という認識しかありませんでした。その為、初めて見た色鮮かなケーキ達は十年たった今までも、色褪せる事なく心の中にずっと残っています。

次に、自分の手でお菓子を作るようになったのは、中学二年生の時でした。新型コロナウイルスの影響で、中学校の行事や、部活、外出など、当たり前前の生活が当たり前にできなくなってしまうしました。そんな色のない毎日を明るくしてくれたのは、やはりお菓子の存在でした。レシピ本や、インターネットサイトに載っている作り方を見て、苦戦しながらも毎日のようにキッチンに立っていました。日が経つにつれて、食べる楽しさだけではなく、作る楽しさを学んだ私は、パティシエという夢を実現したいと思いました。

私が、パティシエになる為の大きな一步を踏み出したのは中学校三年生の事でした。周囲の友達が、公立高校や県内外の私立高校への進学を決定していく中、夢を叶える為の進路というものに長い期間悩まされていました。パティシエという職業は、好きという気持ちだけではできない、決して甘くみてはいけない現実があります。両親や当時の担任の先生と、何度も話し合いをし、私は将来の私の為に、高校生のうちに

資格を取得し現場で多くの経験を積むという決断をしました。やはり、同級生達とは違う道に進むのは不安でした。ですが、パティシエになるきっかけは自分しか掴む事はできないと思います、私は調理師と製菓衛生師の資格が取れる高等専修学校へ進学する事を決めました。

そして、無事高等専修学校へ入学した今年の春。私の夢を叶える為のスタートラインに立ちました。入学して間もない頃は、楽しい学校だなと浮かれていました。そんな私の軽薄な考えを正してくれたのは、とある先生の言葉でした。

「ただこの職業に就きたいだなんて誰でも言えます。叶える事もできます。ですが、皆さんには、自分にしかできない理由や技術を持つ職業人を三年間で目指してほしい。」

私はこの言葉で、自分の夢は自分だけの夢ではなく、自分以外でも叶える事のできるものであった事に気づかされました。

私は、この言葉をきっかけに、改めて自分の夢と向き合う事にしました。世界で活躍する、コンテストで成績を残す、人気のお菓子を作るなど、考えは沢山浮かぶのに、大切な答えは見つからず、時間だけが過ぎていきました。

そして、自分の夢が曖昧なまま入学して三ヶ月がたちました。実習なども本格的に始まり、苦手な作業が増えていく事で焦りを感じた私は、インターネットでプロのパティシエの方の作品を見てコツや自分との違いを探していました。その時、偶然見つけたモンブランに心を揺さぶられました。一目見ただけで自分の夢について悩んで、止まっていた時計の針がいきなり動き出したような感覚が押し寄せ

ました。心の整理がつかないまま、画像のホームページに進むと、書かれていた文字は、「équilibre」。フランス語で「バランス」という意味です。私は、この言葉を聞きやっ自分分の夢、自分にしか叶えられない夢を見つけた気がします。それは、「全ての人が心地よく、五感で楽しめるバランスの良いお菓子を作ること」です。私がパティシエに興味を持つきっかけになった見た目。幼いながらに感じたケーキの優しい味。パティスリーに入った時の香り、音。自分が体験して、心地よいと思った物をバランスよくとり入れたケーキを届けたいと思いました。

今の私にとって、自分の人生の中の記憶を辿り、悩んで見つけた夢は、将来の理想であり、今の私を動かす大きな活力でもあります。沢山の方々に助けられながら見つけた夢は、叶えられる時がくるまで大切にしたいです。私の夢は、全ての人が心地よく、五感で楽しめるバランスの良いお菓子を作るパティシエになることです。



専修学校の部 最優秀賞

父の背中が教えてくれた「働く意味」

青山製図専門学校 一年

後 藤 祐 杏

「人は何のために働いているのだろうか」

以前の私なら、「家族を養うために、お金のためだけに働いているでしょう」と答えていたのかもしれない。

私が小学生の頃、父は祖父の会社を引き継ぎ、休む暇なく日曜日も働いていた。新しい事業を始め、会社は大きくなっていった。仕事も軌道にのり、私達家族は、何不自由なく幸せに暮らしていた。

しかし、その何気ない日常の幸せは一瞬にして失われた。二〇一一年三月十一日、私はあの日を忘れない。東日本大震災のあの日、私は宮城県に住んでいた。

幸い、私の家は流されず、全員無事だった。

震災から数日経った時、私達家族は海の付近に建っていた父の会社に行ってみた。地面は足の踏み場もなく、多くの家、車が積み重なっていた。津波の恐ろしさに心が震えた。父の会社は消えてしまったのだ。

会社の従業員たちは全員無事だった。しかし、会社が全滅したために働く場所を失ってしまった。子供ながらに、会社

を失った父は大丈夫だろうか、と心配した。

そんな心配をよそに、父は決して弱音を吐かなかった。自宅にパソコン、電話を設置、会社の再建にすぐに乗り出した。何もかも失ったのに、何かに突き動かされたようにパソコンに向かう父の背中中は、生きる力にみなぎっていた。震災から一か月後、父だけが宮城に残り、私達家族は、母の実家である沖縄に行くことになった。

宮城を離れる日、泣きながら私は父に聞いた。「どうしてお父さんと一緒に暮らせないの。」父は私の頭を撫でながら、優しくきっぱりと言った。「会社の人達を見捨てるわけにはいかない。また一緒に暮らせるようにお父さん頑張るから。」あれから十一年経ち、小学校から高校と、周りの人たちに支えられ、穏やかに過ごしていた。その間、かつての生活、家族と一緒に過ごすことはなかった。二〇二〇年には、新型コロナウイルスも発生した影響もあり、私達家族が皆で集まったのは、震災以降五回もあっただろうか。

震災から二年後の夏、私は震災後初めて故郷宮城に帰った。父の会社に行った時、思いもかけない多くの笑顔がそこにはあった。震災前より環境は悪化しているはずなのにそこには現実から逃げずに、家族との幸せを取り戻し、地元宮城の復興に確実に前を向いている人達がいた。そして、会社の人達の先頭に立って奮闘する父の背中があった。

私は確信した。「働くってこういう事なのか」と。人は守るべきものがある時、こんなにも素晴らしい力を発揮することが出来るのだということを知った。お金のためだけでなく、家族のために、自分のために、故郷のために、そして人と繋

がために、人は働いている。そこには紛れもなく「生きがい」という言葉が存在する。

「若い世代は仕事をすぐに辞めてしまう」「将来、やりたいことが見つからない」。私達の世代はこのような問題であふれている。当の本人達もどのように解決したらいいか困惑しているのだろう。

私はそういう人達に伝えたい。どんな職業や立場にあっても、自分のため、社会のためになることはきつとあるはずだ。それが、これからの未来をつくっていく私達に必要なものである。

まずは自分で行動しなくては始まらない。

どんなに小さなことでもいい。私も今多くの人に支えられながら建築士になるための勉強をしている。正直、課題の締め切りに追われる事もある。でも、私も社会を支える一人になりたい。

私も新しい未来に向かって一歩ずつ前に進んでいく。父の背中が教えてくれたように。



専修学校の部 優秀賞

専門学校での学び

青山製図専門学校 一年

齋藤 優介

「読書は散歩の様だ、道はいくらでもある」この言葉は、社会人時代に勤めていた会社の会長の言葉である。読書には人それぞれ好みがあり、読み進めていく順序や到着する地点も様々である。人の生き方も同様だろう。私自身、一度社会へ出て、改めて学校へ入学すると決めた時、この言葉が背中を押してくれた。

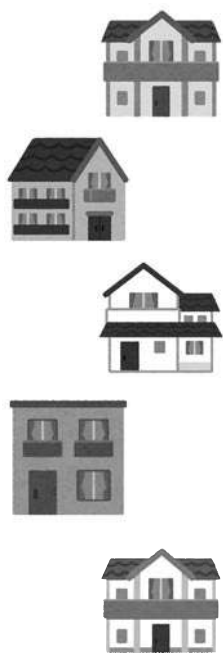
「読書」という言葉がある様に、社会人の時代は本に関わる会社で仕事をしてきた。同じ会社にいるほとんどの人は建築との関わりは無いが、私が所属していた店舗開発という部署は、店舗デザインや什器レイアウトを考えたり、スケジュールやコストの管理を行ったり、設計施工会社との窓口になる業務を行っていた。この店舗開発として働いてきた経験が、より専門的な知識を学んで、新しい業界へチャレンジしたいと思う様になった大きなきっかけである。当時から自分が納得できる仕事がしたいと思い、建築やデザインを見たり、調べたりしていた。アメリカやイタリアなど海外へ旅行に行った時も、自分が気になるデザインばかり探していた。その結

果、表現という魅力にとりつかれ、今、専門学校へ入学して建築を学んでいる。

店舗開発として働いていた社会人の時代はとにかく出張が多く、およそ三年半で四十以上の都道府県へ行き、年間の約三分の二はホテル暮らしをしてきた。ほとんど住んでいないような家の家賃を支払わなければならぬが、各地の文化や文化に基づく建物を見るのにはとても良い環境だった。出張先で空いている時間には、有名建築家設計の建築物を見ることができたし、金沢の町屋や松本の蔵のある街並みなど、一日では味わい切れないその街独特の雰囲気も感じる取ることができた。しかし、学校で設計を学んでみると、建物を見ていた視点がまだまだ甘かったと感じる。例えば、外観のデザインや内装の仕上げ等の見えるところばかりを気にしていたが、構造や材料の質感、建具の配置や光の入り方など、学校で学ぶと気になる事の視野が広がっていくのを感じる。また、今まで無意識に見ていた住宅や施設、ランドスケープなどは、着工から完成に至る以前にも見えない所でプロジェクトは動いていて、長い時間をかけて考えられ、数えきれない程の人が関わっており、その関わった人の努力によって人の心を動かせる建築ができているのだと、建物に対しての視点が変わっていくのが実感できる。

専門学校に入学して半年、社会人時代は何も気にせず業務に取り組んでいたが、建築の勉強をしていると、店舗開発として仕事に就いた瞬間から、建築の世界に踏み込んでいたのだと感じることが多い。それと同時に、今までしてきた仕事、将来就きたい建築の仕事とは違っていた事もハッキリし

た。一部、デザインを考えたり、パースを使ったプレゼン等には設計と言えるが、「創る」仕事は設計施工会社の担当で、あくまでもクライアントとして一緒に考えていただけ、だからである。しかし、今、専門学校で学んでいる設計と、店舗開発という仕事とで共通している点がある。それは、必ず創った空間を使う人が存在していて、どの様な環境を創れば良いのか考え、創造しなくてはいけないという事だ。利用する人の気持ちを考えるとこの事はとても難しい。さらには、デザインという付加価値的なことも考える必要がある。その為、数か月かけて自分自身が納得できる様、何度も設計者と打ち合わせを重ね、意見をすり合わせてきた。しかし、完成してみると様々な評価がある。芸術と同じように、表現された作品に対して良いか悪いかを判断すること自体がとても難しい。そんな、人それぞれに正解あつて当たり前の建築の業界で、将来、少しでもイノベーションを起こせるよう、基本となる知識を専門学校で学んでいきたいと思う。そして、建築の仕事に就いた時には、クライアント側だった自分の気持ち思い出して、コミュニケーションや人の気持ちを考える事を大切にしたいと思う。



イラストの部 最優秀賞



東京都立晴海総合高等学校 一年

兜
心
響

イラストの部 優秀賞



東京都立晴海総合高等学校 一年

山
田
奈
々
実



東京都立府中西高等学校 一年

永
良
紫
織

表彰式（令和４年１２月１６日、東京商工会議所）



表彰状及び賞品授与



作文朗読：中学校の部
（塚本笑里さん）



作文朗読：高等学校の部
（松井幸生さん）



作文朗読：専修学校の部
（後藤祐杏さん）



講評：中学校の部（矢島加都美委員長）



講評：高校・専修学校の部（仁井田孝春委員長）



祝辞：東京都産業教育振興会
（西澤宏繁会長）



祝辞：東京都教育委員会
（吉田直子ものづくり教育推進担当課長）

令和４年度作文コンクール応募校等一覧（応募者数・入選者数）

〈中学校の部〉

番号	設置者	学校名	応募者数	入選者数
1	中央区	銀座中学校	4	3
2		晴海中学校	1	1
3		佃中学校	10	2
4	新宿区	西早稲田中学校	5	2
5		新宿西戸山中学校	4	1
6	墨田区	両国中学校	10	4
7		吾嬬第二中学校	1	
8		寺島中学校	6	
9	江東区	深川第一中学校	1	
10		大島中学校	10	
11	大田区	馬込東中学校	1	
12		大森第六中学校	10	1
13	世田谷区	三宿中学校	2	
14	杉並区	高南中学校	2	1
15	北区	稲付中学校	8	1
16		赤羽岩淵中学校	10	
17	荒川区	尾久八幡中学校	2	1
18		南千住第二中学校	4	
19	足立区	西新井中学校	10	
20		伊興中学校	6	
21	江戸川区	松江第四中学校	2	
22	調布市	第八中学校	8	1
23	町田市	真光寺中学校	10	1
24	私立	愛国中学校	3	1
合計			130	20

〈高等学校・専修学校等の部〉

番号	学校名	応募者数	入選者数
1	東京都立園芸高等学校	10	3
2	東京都立農芸高等学校	5	2
3	東京都立農産高等学校	9	2
4	東京都立農業高等学校	10	1
5	東京都立瑞穂農芸高等学校	7	3
6	東京都立大島高等学校	3	1
7	東京都立足立工業高等学校	1	
8	東京都立葛西工業高等学校	3	1
9	東京都立府中工業高等学校	10	
10	東京都立第四商業高等学校	10	
11	東京都立葛飾商業高等学校	10	1
12	東京都立忍岡高等学校	8	
13	東京都立赤羽北桜高等学校	10	
14	愛国高等学校	9	3
15	岩倉高等学校	2	1
16	京華商業高等学校	9	1
17	日本工業大学駒場高等学校	3	
18	国際共立学園高等専修学校	10	1
小計		129	20
1	青山製図専門学校	10	2
2	中央工学校	3	
小計		13	2
合計		142	22

〈イラストの部〉

番号	学校名	応募者数	入選者数
1	東京都立晴海総合高等学校	4	2
2	東京都立府中西高等学校	1	1
3	東京都立第四商業高等学校	13	
合計		18	3

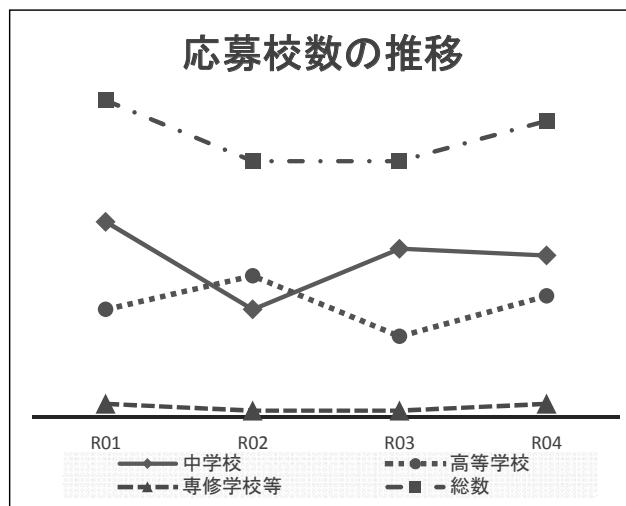
〈まとめ〉（イラストの部を除く）

番号	区分	応募校数	応募者数	入選者数
1	中学校	24	130	20
2	高等学校	18	129	20
3	専修学校	2	13	2
合計		44	272	42

応募校数・応募者数・入選者数の推移

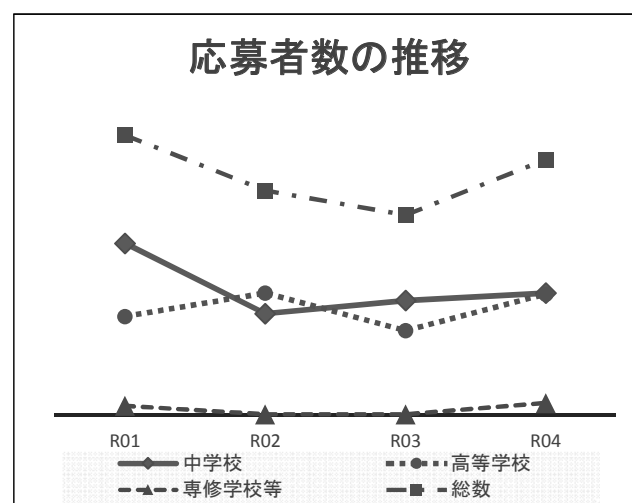
① 応募校数の推移

校種	R01	R02	R03	R04	平均
中学校	29	16	25	24	24
高等学校	16	21	12	18	17
専修学校等	2	1	1	2	2
合計	47	38	38	44	42



② 応募者数の推移

校種	R01	R02	R03	R04	平均
中学校	183	108	122	130	136
高等学校	105	130	90	129	114
専修学校等	10	1	1	13	6
合計	298	239	213	272	256



③ 入選者数の推移

校種	令和元(2019)年度			令和2(2020)年度			令和3(2021)年度			令和4(2022)年度			平均 %
	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	応募者数	入選者数	%	
中学校	183	19	10	108	18	17	122	19	16	130	20	15	15
高等学校	105	15	14	130	20	15	90	14	16	129	20	16	15
専修学校等	10	3	30	1	1	100	1	1	100	13	2	15	61
合計	298	37	12	239	39	16	213	34	16	272	42	15	15

作文のテーマ別応募者数一覧

①作文の内容

次に示す学習を通して体験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

○中学校における技術・家庭科の学習

○高等学校、専修学校、高等専門学校又は短期大学における専門教科の学習

○勤労に関わる体験的な学習

②テーマ

作文の内容について、次のテーマ番号（ア～コ）から関係するものを選択し記述する。

ア 授業等を通して学び得たこと

イ 就業体験や現場実習等によって学び得たこと

ウ 職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと

エ つくることの喜び、ものづくりの喜び

オ 働くことの喜び

カ 学習に対する心構え

キ 私の生きがい

ク 私の進路、将来の夢

ケ 私の職業観

コ その他（産業教育に関わる内容のもの）

③テーマ別応募数とその割合

テーマ 番号	中学校の部						高等学校の部						専修学校等の部					
	R02		R03		R04		R02		R03		R04		R02		R03		R04	
	応募数	(割合)	応募数	(割合)	応募数	(割合)	応募数	(割合)	応募数	(割合)	応募数	(割合)	応募数	(割合)	応募数	(割合)	応募数	(割合)
ア	8	(7%)	23	(19%)	19	(15%)	38	(29%)	27	(30%)	35	(27%)	0	(0%)	0	(0%)	3	(23%)
イ	21	(19%)	0	(0%)	2	(2%)	6	(5%)	7	(8%)	11	(9%)	0	(0%)	1	(100%)	0	(0%)
ウ	16	(15%)	13	(11%)	19	(15%)	11	(8%)	3	(3%)	1	(1%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
エ	5	(5%)	13	(11%)	10	(8%)	2	(2%)	3	(3%)	6	(5%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
オ	1	(1%)	4	(3%)	3	(2%)	1	(1%)	0	(0%)	2	(2%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
カ	3	(3%)	2	(2%)	3	(2%)	4	(3%)	3	(3%)	4	(3%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
キ	2	(2%)	12	(10%)	6	(5%)	10	(8%)	6	(7%)	10	(8%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
ク	34	(31%)	45	(37%)	55	(42%)	45	(35%)	36	(40%)	51	(40%)	1	(100%)	0	(0%)	4	(31%)
ケ	12	(11%)	5	(4%)	11	(8%)	6	(5%)	1	(1%)	6	(5%)	0	(0%)	0	(0%)	6	(46%)
コ	6	(6%)	5	(4%)	2	(2%)	7	(5%)	4	(4%)	3	(2%)	0	(0%)	0	(0%)	0	(0%)
計	108	(100%)	122	(100%)	130	(100%)	130	(100%)	90	(100%)	129	(100%)	1	(100%)	1	(100%)	13	(100%)



令和4年度「作文コンクール」募集要項

1 趣 旨

東京都産業教育振興会の会員校である東京都内の中学校、中等教育学校、義務教育学校、高等学校、専修学校、高等専門学校及び短期大学等に在籍する生徒・学生を対象に、産業教育に関する作文の募集を通して、専門教科の学習や勤労への興味・関心や意欲を喚起し、将来の職業人の育成を図り、もって東京の産業教育の振興と発展に資する。

2 主 催

東京都産業教育振興会

3 後 援

東京商工会議所

4 作文の内容

中学校の技術・家庭科若しくは高等学校や専修学校等における専門教科の学習、または勤労に関わる体験的な学習を通して体験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

【テーマ】

作文の内容について、次のテーマ番号（①～⑩）から関係するものを選択して応募票の欄に記入する。

- ①授業等を通して学び得たこと
- ②就業体験や現場実習等によって学び得たこと
- ③職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと
- ④つくることの喜び、ものづくりの喜び
- ⑤働くことの喜び
- ⑥学習に対する心構え
- ⑦私の生きがい
- ⑧私の進路、将来の夢
- ⑨私の職業観
- ⑩その他（産業教育に関わる内容のもの）

5 作文の題名

作文の内容に沿った「題名」を付ける。

6 応募資格

(1) 中学校の部

東京都内の中学校、中等教育学校の前期課程、義務教育学校の後期課程（東京都産業教育振興会の会員校に限る。）に在籍する生徒

(2) 高等学校・専修学校等の部

東京都内の高等学校、専修学校、高等専門学校及び短期大学等（東京都産業教育振興会の会員校に限る。）に在籍し、産業教育に関する教科・科目を履修している生徒及び学生

7 応募期限

令和4年9月12日（月）

8 応募方法

(1) 作成上の注意

- ア 原則としてA4判の400字詰め原稿用紙(20字×20行・縦書き)を使用する(パソコン等で作成した原稿も可)。なお、生徒指導上の都合で、B4判400字詰め原稿用紙(20字×20行・縦書き)を使用することは可とする。
- イ 原稿用紙の1枚目第1行に「題名」を、第2行に氏名を書く(校名、学科名、学年等は書かない)。
- ウ 原稿枚数は、4枚以上6枚以内とする(枚数等に過不足がある場合は選外となるので注意すること)。
- エ 原稿の欄外右下にページ数を記載する。
- オ 自筆で作品を書く場合はHB以上の濃い鉛筆等を用いて、丁寧かつ鮮明に書くこと。

(2) 提出物

ア 作文原稿(原本)

【生徒ごとに】1部(原本の上に応募票を付けて、左上をステープラーで止める。)

イ 作文原稿(コピー)

【生徒ごとに】3部(それぞれ左上をステープラーで止める。作文原稿にB4判を用いた場合には、必ずA4判に縮小コピーして印刷し提出すること。)

ウ 応募者一覧表

【学校全体で】1部(学校長印を押印すること。応募者は1校10名以内とする。ただし、複数の課程を有する学校(全定通併置校等)については、それぞれの課程ごとに1校の扱いとする。)

9 発 表

入選者の氏名は11月中旬頃に関係学校長へ連絡する。また、入選者の作文は作文コンクール入選作品集『明日に生きる』(第33号)に掲載するとともに、東京都産業教育振興会ホームページに掲載する。

なお、入選作品の掲載に際し人権上の配慮等が必要な場合、事務局の判断において、その趣旨を損なわない範囲で字句の削除や修正等を行うことがある。

10 表 彰

入選者に対して12月中旬頃に表彰式を行い、本会より賞状並びに賞品を授与する。なお、選外者には参加賞を贈呈し、学校長宛てに送付する。

11 その他

- (1) 応募作文は、未発表のものであること。
- (2) 応募作文は返却しない。
- (3) 応募作文の著作権は、東京都産業教育振興会に帰属するものとする。
- (4) 作文中には個人名や具体的な店名、事業所名は記載せず、一般的な名称を記載するようにすること(例：〇〇保育園→保育所、△△△イレブン→コンビニ)。

12 提出物の送付先及び問合せ先

〒163-8001 東京都新宿区西新宿2-8-1 都庁第二本庁舎15階北側

教育庁都立学校教育部高等学校教育課内 東京都産業教育振興会「作文コンクール」担当

電話 03(5320)6729

令和4年度 作文選考委員名簿（順不同・敬称略）

中学校の部

委員長	町田市立真光寺中学校	校 長	矢 島 加都美
委員	中央区立佃中学校	副校長	星 谷 雅 俊
委員	港区立赤坂中学校	統括校長	高 松 政 則
委員	港区立三田中学校	校 長	上 原 良 枝
委員	江東区立深川第一中学校	校 長	佐 川 明 夫
委員	世田谷区立上祖師谷中学校	副校長	毛 利 慎 治
委員	世田谷区立三宿中学校	校 長	濱 川 一 彦
委員	足立区立伊興中学校	校 長	千 葉 千 登 勢
委員	調布市立調布中学校	副校長	北 島 陽 子
委員	小金井市立小金井第二中学校	校 長	川 井 ま さ よ
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	宮 西 真
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	笠 井 淳 子

高等学校・専修学校等の部

委員長	東京都立晴海総合高等学校	校 長	仁 井 田 孝 春
委員	東京都立農産高等学校	校 長	江 森 忍
委員	東京都立橘高等学校	校 長	深 澤 栄 次
委員	東京都立第四商業高等学校	校 長	昼 間 一 雄
委員	東京都立府中西高等学校	校 長	小 川 直 哉
委員	昭和学園第一高等学校	教 諭	小 林 繭 子
委員	京華商業高等学校	教 諭	小 口 浩 史
委員	ハリウッド美容専門学校	教 授	光 江 徳 尚
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	千 々 和 秀 敏
委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	堀 典 子

あ　と　が　き

はじめに、令和四年度作文コンクールで入選された生徒及び学生の皆さんに、心よりお祝い申し上げます。また、作品を応募してくださった生徒や学生の皆さん、御指導いただいた先生、厳正かつ公平に審査していただいた選考委員の皆様、さらには御後援いただいた東京商工会議所の皆様に、心より感謝申し上げます。

さて、今年度の応募は、四四校二七二作品でした。昨年度よりも全体で五九作品増加となり、コロナ禍以前の応募数に回復しました。作品の内容からも、コロナ禍で中止していた就業体験やインターンシップ等が再開されつつある様子がうかがえました。

また、イラストの部は、高校生の応募作品の選考としました。将来への可能性と働く喜びをイメージしたものが多く、どの作品も豊かな表現力で描かれていました。

この入選作品集が会員のみならず広く活用され、文字通り「明日に生きる」活力となることを切に願っています。

なお、このたびの入選作品集を発行するにあたり、できる限り原文を尊重して掲載していますが、人権上の配慮等が必要な場合には、作文の趣旨を損なわない範囲で字句を修正していますので、御了解ください。

結びに、生徒や学生の皆さんが作文を通して自ら学ぶ意義を考え、将来の夢を実現するきっかけの場となるよう、来年度も本会の作文コンクールを実施します。会員校の皆さんから、より多くの作品が応募されることを期待しています。

明日に生きる 第三十三号

— 作文コンクール入選作品集 —

令和五年三月一日 発行

発 行 東京都産業教育振興会

〒二六―八〇二 東京都新宿区西新宿二―八―一
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内
電 話 〇三―五三二―六七二九

印 刷 株式会社小葉印刷所